

沼野充義教授 履歴・業績表

業績

1977年3月 東京大学教養学部教養学科学士（卒業論文 Становление личности Аркадия в романе Достоевского «Подросток»）

1979年3月 東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻修士課程）修士（修士論文『ユーレイ・オレーシャの創作技法 世界を見る技術』川端香男里教授指導）

1981年9月-1985年7月 ハーヴァード大学フルブライト全額給費奨学生として留学（Department of Slavic Languages and Literatures, Graduate School of Arts and Sciences 博士課程、指導教授 Jurij Striedter, Donald Fanger）

1984年6月 ハーヴァード大学修士

1985年3月 東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻博士課程）単位取得満期退学

教歴

1984年2月-1985年6月 ハーヴァード大学、ティーチング・アシスタント（担当授業：Striedter 教授の「トルストイ」、Fanger 教授の「ドストエフスキー」）

1985年8月-1989年1月 東京大学教養学部、専任講師（ロシア語教室・教養学科ロシア分科）

1987年10月-1988年9月 ワルシャワ大学東洋学研究所、客員講師（日本語日本文学）

1989年1月-1994年3月 東京大学教養学部、助教授（ロシア語教室・教養学科表象文化論）

1994年4月-2004年3月 東京大学文学部、助教授（スラヴ語スラヴ文学研究室および西洋近代語近代文学研究室）

2000年5月-11月 ロシア国立人文大学（モスクワ）、客員研究員（国際交流基金フェロー）

2002年10月-11月 モスクワ大学アジア・アフリカ研究所、客員教授

2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授（スラヴ語スラヴ文学研究室および西洋近代語近代文学研究室）

2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部に新設された現代文芸論研究室教授。スラヴ語スラヴ文学研究室教授を兼任。

2016年7月 ハーヴァード大学世界文学研究所（Institute for World Literature）ハーヴァード大学夏期集中セッション・セミナーリーダー

2018年7月 ハーヴァード大学世界文学研究所（Institute for World Literature）東京大学夏期集中セッション・セミナーリーダー

2020年3月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部を定年退職

受賞

第6回木村彰一賞（1997年）シンボルスカ詩集『終わり始まり』の翻訳およびロシア・ポーランド文学研究の分野での著作活動に対して

ポーランド文化功労勲章（2001年）ポーランド文化大臣より

第24回サントリー学芸賞（2002年）文学・芸術部門 著書『徹夜の塊 亡命文学論』に対して

第 55 回読売文学賞評論・伝記賞 (2004 年) 著書『徹夜の魂 ユートピア文学論』に対して
日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員表彰 (平成 30 年度)
ベネディクト・ポラク賞 (2018 年) 日本におけるポーランド文学普及の顕著な業績に対して

国内の大学等での講師歴 (非専任)

1987 年から現在までに以下の大学等で非常勤講師を勤めた経験がある。

信州大学 (集中講義、比較文学)、立教大学 (ロシア語)、明治学院大学 (ロシア東欧文学)、東京大学教養学部 (学内非常勤、教養学科ロシア科: ポーランド語ポーランド文学)、東京外国語大学 (学部: 東欧文学、および大学院: ロシア文学)、慶応義塾大学文学部 (総合講座「ユートピアの期限」、北海道大学、上智大学

また、かわさき市民アカデミー 講座「世界を旅する 14 ポーランド・ツアー」全 12 回の講座の組織および一部講義を行った (2015 年 10 月～2016 年 1 月)。

国外での主要な学術調査

1995 年 9 月 ポーランド現代文学・文化事情調査 (科研費国際学術) ポーランド (ワルシャワ・クラクフ・グダンスク)

1997 年 3 月 ロシア・ウクライナ文化の現状と民族問題調査 (科研費国際学術) ロシア連邦 (モスクワ) およびウクライナ共和国 (オデッサ・ヤルタ・フェオドシア)

1997 年 5 月 ロシア教育事情調査およびロシアの大学との学術交流の可能性調査 (セゾン文化財団助成) ロシア連邦 (モスクワ)

1998 年 3 月および 1999 年 4～5 月 国際交流基金の委嘱によりロシア文化事情調査をモスクワ、サンクト・ペテルブルク、エカテリンブルクで実施

2000 年 5 月～11 月 国際交流基金フェローシップ助成によるロシア国立人文大学との共同研究「ロシア文学における日本のイメージ・日本文学におけるロシアのイメージ」

学会等での活動

日本ナボコフ協会 運営委員 1999 年～、事務局長 1999 年～2000 年

リエトヴァの会創設メンバー 2003 年

日本ロシア文学会 会長 2009～2013 年、ロシア文学会大賞選考委員長 2015～2017 年

日本ロシア・東欧研究連絡協議会 (JCREES) 代表幹事 2014～2017 年

日本学術会議 連携会員 2014 年～

日本スラヴ学研究会 会長 2015～2019 年

表象文化論学会 学会賞選考委員 2016～2017 年

日本文藝家協会 会員、協会編纂物委員

日本ペンクラブ 国際委員会委員長 2015～2019 年、理事 2017～2019 年、常務理事 2019 年～

主な社会活動・学外組織委員など

毎日新聞 書評委員 1995 年～

セゾン文化財団 評議員 1999 年～2015 年、理事 2015 年～

新聞三社連合 文芸時評 (東京新聞・中日新聞・北海道新聞・西日本新聞に配信) 2004 年～2015 年

読売文学賞選考委員 2006 年～

野間文芸翻訳賞 (講談社) 選考委員 2006～2007 年

文化庁 JLPP (現代日本文学の翻訳普及事業) 作品選定委員・企画委員・翻訳コンクール審査委員等、2007年～
一般財団法人東京大学出版会 企画委員 2007年～2020年
早稲田大学坪内逍遙大賞選考委員 2007～2013年
サントリー学芸賞選考委員 2010年～
文化庁芸術選奨選考委員 2010～2016年、2019年～
国際交流基金 Japanese Book News 編集委員、国際交流基金賞第一次選考委員 (2012年～)
親鸞賞 (一般財団法人本願寺文化興隆財団) 選考委員 2016年～
毎日出版文化賞選考委員 2017年～
公益財団法人一ツ橋文芸振興会 評議員を経て、2019年から理事

*その他、日本文学出版交流センター・アドヴァイゾリーコミッティ委員、しずおか世界翻訳コンクール審査員、日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト企画委員、北海道大学スラブ研究センター運営委員、光文社感想文コンクール審査委員、文の京文芸賞 (東京都文京区) 選考委員、ロシア・ブッカー文学賞推薦委員、岐阜県産業文化事業団・織部賞推薦委員、アリオン音楽財団・企画委員、新潮新人賞選考委員などを務めた。

博士論文指導・主査

*東京大学大学院人文社会系研究科指導・審査主査をつとめた博士論文。現代文芸論専門分野に限る。スラヴ語スラヴ文学専門分野の博士論文については、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部スラヴ語スラヴ文学研究室『SLAVISTIKA』XXXV(2020)に一覧を掲載予定。

秋草俊一郎 (2008年) 「訳すのは「私」——ウラジーミル・ナボコフにおける自作翻訳の諸相」(平成20年度東京大学総長大賞受賞。後に単行本『ナボコフ 訳すのは「私」—自己翻訳がひらくテキスト』東京大学出版会、2011年)

亀田真澄 (2013年) 「五カ年計画のメディア・イメージ——ソ連とユーゴの比較」(東京大学学術成果刊行助成を得て、単行本『国家建設のイコノグラフィ——ソ連とユーゴの五カ年計画プロパガンダ』成文社、2014年)

Ryan Shaldjian Morrison ライアン・シャルジアン・モリソン (2016年) *Waves into the Dark: A Critical Study of Five Key Works from Ishikawa Jun's Early Writings*

Viacheslav Surovyi ヴィヤチェスラフ・スロヴェイ (2017年) 「概念メタファー分析から文化的キーワード翻訳可能性の探求へ——日本語、英語、ロシア語、ウクライナ語に即して」

小澤裕之 (2017年) 「理知のむこう——ダニエル・ハルムスの手法と詩学」(東京大学学術成果刊行助成を得て、単行本『理知のむこう—ダニエル・ハルムスの手法と詩学』未知谷、2019年)

高橋知之 (2018年) 「反省と直接性のあいだ——ペリンスキーの構想、プレシチュエフの実践、グリゴリーエフの漂泊」(東京大学学術成果刊行助成を得て、単行本『ロシア近代文学の青春: 反省と直接性のあいだで』東京大学出版会、2019年)

片山耕二郎 (2019年) 「芸術家小説『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』の成立と性質」(東京大学学術成果刊行助成を得て、単行本『ドイツ・ロマン主義と〈芸術家小説〉——ティーク『シュテルンバルト』の成立と性質』として国書刊行会より、2020年3月25日刊行予定)

邵丹 (2019年) 「現代日本における外国文学の受容と機能——1970年代のアメリカ文学の翻訳に即して」

今井亮一 (2020年) 「路地と世界——世界文学論から読む中上健次作品研究」

主要業績

分類表

A 単著書

B 共著書

C 編著・共編著・監修

(C-1) 編著 (C-2) 共編著 (C-3) 監修

D 翻訳書

(D-1) 個人訳・個人編訳、(D-2) 共訳・共編訳、(D-3) 編纂・監修

E 論文

F 書評

G 解説

H 評論・エッセイ

I 学会発表・講演

J 会議主催、チェアほか

K テレビ・ラジオでの啓蒙・教育活動

A 単著書

『屋根の上のバイリンガル』筑摩書房、1988年4月。1996年3月、白水社より改訂増補版。

『永遠の一駅手前 現代ロシア文学案内』作品社、1989年6月（本書のうち2章が「Иностранная литература」（モスクワ）1990年2月号にロシア語訳で掲載された）。

『夢に見られて ロシア・ポーランドの幻想文学』作品社、1990年8月。

『NHK 気軽に学ぶロシア語』日本放送出版協会、1993年3月。2004年2月、改訂新版として『NHK CDブック 気軽に学ぶロシア語』。

『スラヴの真空 東欧・ロシアの20世紀末を遊覧する』自由国民社、1993年10月。

『モスクワ―ペテルブルグ縦横記』岩波書店、1995年3月。

『W文学の世紀へ 境界を越える日本語文学』五柳書院、2001年12月。

『徹夜の塊 亡命文学論』作品社、2002年2月。

『徹夜の塊 ユートピア文学論』作品社、2003年2月。

『100分de名著 チェーホフ「かもめ」』NHK出版、2012年9月。

『世界文学から／世界文学へ 文芸時評の塊 1993-2011』作品社、2012年10月。

『チェーホフ 七分の絶望と三分の希望』講談社、381頁、2016年1月。

『100分de名著 スタニスワフ・レム「ソラリス」』NHK出版、2017年12月。

『徹夜の塊 世界文学論』作品社、2020年4月（予定）。

B 共著書

富山太佳夫・小池滋他編『城と眩暈 ゴシックを読む』国書刊行会、1982年9月（「彷徨と喪神 ロシア文学におけるゴシック・ロマンスの系譜」265-289頁を執筆）。

川端香男里編『ロシア文学史』東京大学出版会、1986年3月。第2刷、1986年7月（第VII章「ソヴィエト時代の文学」の第6節「1960年代から今日まで」324-334頁、および第2刷の「補 ペレストロイカ以降」334-342

頁を執筆)。

池内紀・種村季弘ほかと共著『パロックの愉しみ』筑摩書房、1987年7月(第8章「文法の迷宮 スラヴ圏のパロック文学」205-228頁を執筆)。

和田春樹編『ペレストロイカを読む 再生を求めるソ連社会』御茶の水書房、1987年9月(解説「よみがえる言葉」114-118頁を執筆、またチンギス・マイルトマートフ「断頭台」156-166頁を沼野恭子と共訳)。

袴田茂樹編『もっと知りたいソ連』弘文堂、1988年11月(「社会の中の文学」273-300頁、「映画の大国」301-312頁を執筆)。

青山南・江中直紀・富土川義之・樋口大介と共著『世界の文学のいま』福武書店、294頁、1991年11月25日刊(全40章のうち現代ロシア文学関係の8章、全体の約5分の1相当を執筆)。

川端香男里・金沢美知子編著『ロシア文学』放送大学教育振興会、1994年3月(第15章「現代のロシア文学」129-137頁を執筆)。

加藤光也編著『今日の世界文学』放送大学教育振興会、1994年3月(第3章「雪どけからペレストロイカへロシア文学」32-42頁、第4章「もう一つのヨーロッパ文学を求めて 東欧文学」43-52頁を執筆)。

川成洋編『世界の古書店』丸善、1994年3月(「モスクワとワルシャワの名もない古書店」197-204頁を執筆)。

安原顯編『私の外国語上達法』メタログ、1994年5月(「古代教会スラヴ語を必死に勉強していた頃」204-207頁を執筆)。

ワタリウム美術館編『ロトチェンコの実験室』新潮社、1995年11月(「軽やかな前衛 ソヴィエト文化史の中のロトチェンコ」113-120頁を執筆)。

望月哲男・亀山郁夫・井桁貞義ほかと共著『現代ロシア文化』国書刊行会、2000年2月(「ロシア文学の境界どこからどこまでがロシア文学なのか」37-77頁を執筆)。

楯岡求美と共著『ロシア文化事情調査報告書』国際交流基金(部内資料・非売品)、2000年3月(全体にわたって共同執筆)。

杏掛良彦編『^{スラヴ}詩 女神の娘たち 女性詩人、十七の肖像』未知谷、2000年9月(「ヴィスワヴァ・シンボルスカ」321-347頁を執筆)。

選書メチエ編集部編『異文化はおもしろい』講談社、2001年11月(「永遠の往復運動 「こんなにも違う！」と「こんなにもわかる！」の間で」82-92頁を執筆)。

宮本久雄・岡部雄三編『「語りえぬもの」からの問いかけ』講談社、2002年3月(第11講「「言い表せないもの」の詩学 チュツチェフ「沈黙！」の逆説」206-239頁を執筆)。

マイクロソフト製作『エンカルタ百科事典』、2003年6月(『罪と罰』の項目を執筆)。

柴宜弘編『バルカンを知るための65章』明石書店、2005年4月(「「世界文学」としてのバルカン文学」302-306頁を執筆)。

柴田元幸と共著『200X年 文学の旅』作品社、2005年8月(全体の大部分は『新潮』で交互に連載された「文学の旅」から。その他、池内紀・柴田元幸・中村和恵・堀江敏幸とのシンポジウム「外国文学は「役に立つ」のか?」289-314頁、レベッカ・ブラウン&小野正嗣とのシンポジウム「新しい文学の声」315-330頁も所収)。

沼野恭子と共著『世界の食文化⑨ ロシア』農文協、297頁、2006年3月10日刊。

池内紀・大石和欣・工藤庸子・柴田元幸と共著『世界の名作を読む』日本放送出版協会、2007年4月(「4 ドストエフスキー『罪と罰』」37-49頁、「5 チューホフ『ワーニカ』『可愛い女』『犬を連れた奥さん』」50-62頁を執筆)。

大江健三郎ほかと共著『21世紀ドストエフスキーがやってくる』集英社、2007年6月(「さまざまな声のカーニバル ドストエフスキー研究と批評の流れを瞥見する」37-48頁を執筆、また大江健三郎との対談「ドストエフスキーが21世紀に残したもの」110-143頁も所収)。

東京大学編『学問の扉 東京大学は挑戦する』講談社、2007年7月（「新しい世界文学と向きあうために」44-54頁を執筆）。

岩波書店編集部編『翻訳家の仕事』岩波書店、2006年12月（「さまざまな声のカーニバル」37-48頁、「ドストエフスキーが21世紀に残したもの」（大江健三郎との対談）110-143頁）。

宇山智彦編『講座スラブ・ユーラシア学2 地域認識論 多民族空間の構造と表象』講談社、2008年2月（「第三章 現代中欧文学と地域アイデンティティー〈中（東）欧意識〉再検討の試み」116-148頁を執筆）。

柴田元幸・野崎歓と共著『文学の愉しみ』日本放送出版協会、2008年3月（「10 ロシア文学」116-129頁、「11 東欧文学」130-143頁、「12 世界文学」144-159頁、「14 日本の作家を迎えて③ゲストー池澤夏樹さん」175-190頁を執筆、また柴田元幸・野崎歓とともに「15 まとめ（共同討論）」191-198頁に参加）。

中村邦生・吉田加南子編『ラヴレターを読む 愛の領分』大修館書店、2008年12月（「二一年前に贈ってくださったプローチもつけました 皇后アレクサンドラ・フォードロヴナ」219-233頁）。

加藤有子編『ブルーノ・シュルツの世界』成文社、2013年11月（「魂の親和力が形づくる星座 ブルーノ・シュルツと世界文学」177-207頁を執筆）。

Joachim Küpper, ed., *Approaches to World Literature*, Berlin: Akademie Verlag, 2013（“Shifting Borders in Contemporary Japanese Literature: Toward a Third Vision,” 147-166頁を執筆）。

野崎歓編『文学と映画のあいだ』東京大学出版会、2013年6月（「アヴァンギャルドと古典の間の巨大な振幅 ここでしか教えてもらえない、ロシア文芸映画を観る五つの効用」107-128頁を執筆）。

国際学会 proceedings、Международная конференция «Диалог армянской, русской и японской культур: Опыт сравнительного анализа», Yerevan: RAU Publishing House、141頁、2013年12月（99-104頁を分担執筆）。

秋山聰・野崎歓編『人文知2 死者との対話』東京大学出版会、2014年11月（第8章「復活の夢と不死のユートピア統計としての 大量死を超えて（ロシア・東欧文学の場合）」181-202頁を執筆）。

工藤庸子・池内紀・柴田元幸と共著『世界の名作を読む 海外文学講義』角川ソフィア文庫、2016年8月（第5章と第6章、89-123頁を執筆）。

藤井光編『文芸翻訳入門』フィルムアート社、2017年3月（「なぜ古典新訳は次々に生まれるのか？」53-80頁を執筆）。

亀山郁夫と共著『ロシア革命100年の謎』河出書房新社、2017年10月。

アメリカ学会編『アメリカ文化事典』丸善出版、2018年1月（「アメリカ文学と世界文学」586-587頁を執筆）。

中央公論新社編『わたしの「もったいない語」辞典』中央公論新社、2018年1月（「鉄のカーテン 歴史は繰り返す？」178-179頁を執筆）。

坂本龍一・谷川俊太郎ほかと共著『高校生と考える希望のための教科書 桐光学園大学訪問授業』左右社、2018年4月（「ポスト・トゥルース時代の文学」324-342頁を執筆）。

C 編著・共編著・監修

C-1 編著

『ロシア怪談集』河出書房新社、1990年5月（編者あとがき「ロシアの怪談？」422-430頁を執筆）。

『東欧怪談集』河出書房新社、1995年1月（編者あとがき「形式と混沌のはざままで」419-429頁を執筆）。

『未来の後に ロシア文化研究の新しいパースペクティヴ』東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学沼野充義研究室（自家版・非売品）、1996年6月（「はじめに」5-10頁を執筆）。

『ユートピアへの手紙 世界文学からの20の声』河出書房新社、1997年1月（編者の依頼に応じて書かれた外国作家20名、計21編のエッセイの翻訳と解説を収める。分量的には解説が本全体の約2分の1を占め、すべて単独執筆。エッセイのうち11編を翻訳、1編を共訳）。

『イリヤ・カバコフの芸術』五柳書院、1999年8月（第1部「イリヤ・カバコフの芸術」7-41頁を執筆）。

『ユダヤ学のすべて』新書館、1999年12月（序文「あなたはユダヤ人になれますか？」8-22頁の他、「ヤコブソン」「シャガール」「ユダヤ文学は存在するか」「マンデリシュターム」「シュルツ」「バーベリ」「ソロス」の7項目8頁分を執筆）。

『多分野交流演習論文集 とどまる力と越え行く流れ——文化の境界と交通』東京大学大学院人文社会系研究科多分野交流プロジェクト、2000年3月（「はじめに」1-2頁、巻頭論文「とどまる力と越え行く流れ」3-11頁、「世界の中の日本文学 越境、それとも境界の変更？」179-193頁を執筆）。

Теория катастрофы. Современная японская проза. М., «Иностранка», 2003（国際交流基金との共同出版による現代日本小説集『カタストロフの理論 現代日本小説』〔ロシア語訳〕。編者として作品を選定、序文を執筆）。

『未来を拓く人文・社会科学15 芸術は何を超えていくのか？』東信堂、2009年3月（「はじめに 境界とアイデンティティ、あるいは「一」と「多」の倫理に向けて」1-4頁を執筆、また『《シンポジウム》未来への郷愁 超えていくもの/とどまるもの』（多和田葉子・沼野充義・細川周平・楯岡求美・齋藤由美子）172-196頁を所収）。

『世界は文学でできている 対話で学ぶ〈世界文学〉連続講義』光文社、2012年1月。（リービ英雄、平野啓一郎、ロバート・キャンベル、飯野友幸、亀山郁夫との対話形式の講義集。「おわりに 「三・一一後」の世界文学を読むために」360-374頁を執筆。）

『やっぱり世界は文学でできている 対話で学ぶ〈世界文学〉講義2』光文社、2013年11月（亀山郁夫、野崎歓、都甲幸治、綿矢りさ、多和田葉子との対話形式の講義集。「おわりに あえて文学を擁護する」349-364頁を執筆）。

『それでも世界は文学でできている 対話で学ぶ〈世界文学〉講義3』光文社、2015年3月（加賀乙彦、田原×谷川俊太郎、辻原登、ロジャー・パルバース、アーサー・ビナードとの対話形式の講義集。「二〇一四年世界文学の旅 あとがきに代えて」269-291頁を執筆）。

『8歳から80歳までの世界文学入門 対話で学ぶ〈世界文学〉連続講義4』光文社、2016年8月（池澤夏樹、小川洋子、青山南、岸本佐知子、マイケル・エメリックとの対話形式の講義集。「二〇一五年にかけて考えたこと あとがきに代えて」315-340頁を執筆）。

『つまり、読書は冒険だ。対話で学ぶ〈世界文学〉連続講義5』光文社、2017年3月（川上弘美×小澤実、小野正嗣、張競、ツベタナ・クリステフとの講義形式の講義集。ならびに、柳原孝敦・阿部賢一・亀田真澄・奈倉有里とのシンポジウムと、ライアン・モリソン、ヴィヤチェスラヴ・スロヴェイ、邵丹、鄭重、ウッセン・ポタゴス、ソン・ヘジョン、エルジビエタ・コロナとのシンポジウムを所収。「あとがき 二十六回の「対話」を終えて」378-381頁を執筆）。

World Literature and Japanese Literature in the Era of Globalization: In Search of a New Canon (Proceedings), The University of Tokyo: Department of Contemporary Literary Studies, 2018.3.

C-2 共編著

大岡信・奥本大三郎・川村二郎・小池滋と共編『世界文学のすすめ』岩波書店、1997年10月（共編者全員による巻頭座談会「世界文学のすすめ」11-60頁に参加、「アンナ・カレーニナ」271-280頁を執筆）。

越川芳明・柴田元幸・野崎歓・野谷文昭と共編『世界×現在×文学 作家ファイル』国書刊行会、1997年10月（ロシア・ポーランド文学に関して3項目6頁分を執筆）。

Новая японская проза. Он/Она. В 2 томах. Составители: Мицуёси Нумано и Григорий Чхартишвили. Москва: Издательство «Иностранка», 2001.（グリゴーリイ・チハルチヴィリと共編『新しい日本小説』『彼』『彼女』全2巻、モスクワ、イノストラナカ社、2001年3月。「Он」「彼」の巻に巻頭論文「Не только самураи. Про женоподобных японских мужчин и немножко странную литературу」（стр. vii-xxx）を執筆。）

安宇植・池内紀・池澤夏樹ほか25名との共同編集委員『週刊朝日百科 世界の文学』朝日新聞社、1999年7月

18日-2001年11月11日刊、全120号。全体の企画・編集に参加。以下の4号の責任編集者を務める。

第19号「ヨーロッパⅢ ⑨HG ウェルズ、ジュール・ヴェルヌほか 科学と文学の出会い」3-257-3 = 288頁、1999年11月21日刊。

第71号「ヨーロッパⅤ ①マヤコフスキー、ゴーリキーほか ロシア革命の光と闇」5-001-5 = 032頁、2000年11月26日刊。

第78号「ヨーロッパⅤ ⑧パステルナーク、スタニスワフ・レムほか もう一つのヨーロッパを求めて」5-225-5-256頁、2001年1月21日刊。

第120号「文学はどこへ向かうか」（この号のみリービ英雄と共同責任編集）12-289-12-320頁、2001年11月11日刊。

小森陽一・富山太佳夫・兵藤裕己・松浦寿輝との共同編集委員『岩波講座 文学』岩波書店、2002年10月-2004年5月、13巻+別巻1。各巻の詳細は以下の通り。

第9巻『フィクションか歴史か』2002年9月。

第3巻『物語から小説へ』2002年10月（巻頭論文「まえがき これから先も当分死ぬことのない小説のために」1-15頁を執筆）。

第11巻『身体と性』2002年11月。

第2巻『メディアの力学』2002年12月。

第7巻『つくられた自然』2003年1月。

第13巻『ネイションを超えて』2003年3月。

第1巻『テキストとは何か』2003年5月。

第12巻『モダンとポストモダン』2003年6月。

8巻『超越性の文学』2003年8月（「まえがき 日常を超えたものと向き合うために」1-16頁、「6 ロシア・ユートピアニズムの詩学」133-155頁を執筆）。

第10巻『政治への挑戦』2003年10月。

第4巻『詩歌の饗宴』2003年11月。

第6巻『虚構の愉しみ』2003年12月（「あるラディカルな相対主義者の肖像 スタニスワフ・レム論」219-239頁を執筆）。

第5巻『演劇とパフォーマンス』2004年2月。

別巻『文学理論』2004年5月（「まえがき 理論を携え、新しい世界文学に向けて旅立とう」1-17頁を執筆）。

柴田元幸・藤井省三・四方田犬彦と共編『世界は村上春樹をどう読むか』文藝春秋社、2006年10月（「Ⅲ 翻訳本の表紙カバーを比べてみると」101-135頁の司会を担当、「V ワークショップ1 翻訳の現場から」155-194頁の司会を柴田元幸と担当、「シンポジウムを終えて 新しい世界文学に向けて」233-240頁を執筆）。

若島正と共編、*Revising Nabokov Revising: Proceedings of the International Nabokov Conference in Kyoto*, Kyoto: The Nabokov Society of Japan, 2011（“On Stylistic Exuberance: Nabokov's *Gift* as a Russian Novel,” pp.63-69を執筆）。

Numano, Mitsuyoshi, et al. eds., *Russian Literature and East Asia (Proceedings of the Panel at ICCEES World Congress VIII)*, Stockholm, 2011.3.

Numano, Mitsuyoshi, et al. eds., *Русская литература как социальный институт (Proceedings of the Conference at the University of Tokyo)*, 2011.3.

沼野充義ほか編『本郷の春 ウラジーミル・ナボコフと亡命ロシア作家たちをめぐる連続講義の記録』2011年3月。

ドミトリー・バグノポリスキーと共編『ヴェルボンド』（1号）、2011年6月。

若島正と共編『書きなおすナボコフ、読みなおすナボコフ』研究社、2011年6月（「過剰な文体的豊饒さ 『賜

物』はどのようなロシアで書かれているのか」281-294頁を執筆、また若島正との対談「ロシア作家としてのナボコフ『賜物』のベルリンから『ロリータ』のアメリカへ」295-324頁を所収、若島正との「編者あとがき」325-329頁を共著。

塩川伸明・小松久男との編集委員『ユーラシア世界』東京大学出版会、2012年5月-9月、全5巻。全巻にわたって共編。各巻の詳細は以下の通り。

『ユーラシア世界① 〈東〉と〈西〉』（この巻は宇山智彦も編者）、2012年5月。

『ユーラシア世界③ 記憶とユートピア』2012年6月。

『ユーラシア世界② ディアスポラ論』2012年7月（「総論 ディアスポラ論」1-17頁、および「境界を越えていくロシア・東欧作家たち 比較亡命文学論の試み」21-49頁を執筆）。

『ユーラシア世界④ 公共圏と親密圏』（この巻は松井康浩も編者）、2012年9月。

『ユーラシア世界⑤ 国家と国際関係』2012年9月。

奥彩子・西成彦と共編『東欧の想像力 現代東欧文学ガイド』松籟社、2016年1月（「巻頭論文「東欧文学とは何か？ 間の世界の地詩学を求めて」11-40頁を執筆）。

Nana Gelashvili と共編、*Dialogue between Georgia and Japan: Exploring the History and Future of Scientific Cultural Exchange (Proceedings)*, The University of Tokyo: Department of Contemporary Literary Studies, 2018.3.

野崎嶺と共編著『ヨーロッパ文学の読み方—近代篇』放送大学教育振興会、2019年3月。

望月哲男、池田嘉郎と共同編集代表『ロシア文化事典』丸善出版、2019年10月。

巽孝之、木村朗子と共編『思想 危機の文学』（2019年11月号）（巽孝之・木村朗子との共著で「提起 危機に立ち向かう文学」7-8頁を執筆、また「世界（文学）とは何か？ 理念、現実、実践、倫理」9-23頁を執筆）。

C-3 監修

『世界の歴史と文化 中欧——ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリー』新潮社、1996年2月（全体にわたる編集・監修、および中欧〔特にポーランド〕の文化・文学・音楽・演劇などの項目の一部執筆）。

『新版 ロシアを知る事典』平凡社、2004年1月（川端香男里・佐藤経明・中村喜和・和田春樹・塩川伸明・栖原学と共同監修）。

『世界の国々に35 ロシア』ポプラ社、2009年3月（文・写真は吉田忠正）。

『村上春樹における秩序』淡江大学出版中心、2017年7月（曾秋桂編。「監修のことば」v-vii頁、ならびに「「かえるくん、東京を救う」と世界文学」55-80頁を執筆）。

『村上春樹における魅惑』淡江大学出版中心、2018年6月（曾秋桂編。「監修のことば」として「「人間ならざる者たち」の魅惑と恐怖 村上文学における動物（「象の消滅」を中心に）」19-42頁を執筆）。

D 翻訳

D-1 訳書・編訳書

《ロシア語》アレクサンドル・グリーン『輝く世界』月刊ペン社、1978年12月（訳者解説「伝説の息吹き、アレクサンドル・グリーン」283-300頁）。1993年8月に沖積舎より改訂版。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『金星応答なし』早川書房、1981年1月（訳者あとがき「レムの青春」477-489頁）。

《ロシア語》ヴェニアミン・カヴェーリン『師匠たちと弟子たち』月刊ペン社、1981年5月（訳者解説「夢に見られて ヴェニアミン・カヴェーリンの生涯と作品」221-251頁）。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム「ベテン師に囲まれた幻視者」『悪夢としてのP・K・ディック 人間、アンドロイド、機械』サンリオ、1986年8月、204-235頁。

《ロシア語》セルゲイ・エイゼンシュテイン「映画における第四次元」岩本憲児編『エイゼンシュテイン解説』フィルムアート社、1986年10月、102-125頁。

《ロシア語》ヨシフ・ブロッキー『大理石』白水社、1991年10月（訳者解説「詩人と戯曲」128-137頁）。

《ロシア語》ヨシフ・ブロッキー『私人 ノーベル賞受賞講演』群像社、1996年11月（訳者解説、46-62頁）。

《ポーランド語》ヴィスワヴァ・シンボルスカ『終わり始まり』未知谷、1997年5月（訳者解説「普通のユートピアに抗して」105-126頁）。

《ロシア語》セルゲイ・ドヴラートフ『わが家の人びと ドヴラートフ家年代記』成文社、1997年10月（訳者解説「世界は不条理で、人びとは可笑しく哀しい 簡潔なドヴラートフを長々しく称えて」199-200頁）。

《ポーランド語》イグナツィ・クラシツキ『ミコワイ・ドシフィヤトチンスキの冒険』『ユートピア旅行記叢書第9巻 東欧・ロシア』岩波書店、1998年9月、1-208頁（訳者解説「ポーランドの知 遠い島から来た男」387-406頁）。

《ポーランド語》イグナツィ・クラシツキ「『寓話集』より」小原雅俊編『文学の贈物』未知谷、2000年6月、171-180頁。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム「対立物の統一 ホルヘ・L・ボルヘスの散文」澁澤龍彦ほか著『ボルヘスの世界』国書刊行会、2000年10月、183-190頁。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『ソラリス』国書刊行会、2004年9月（訳者解説「愛を超えて」347-369頁）→ 2015年4月、ハヤカワ SF 文庫に収録。

《ロシア語》ウラジーミル・ナボコフ『賜物』河出書房新社、2010年4月（「訳者解説」585-612頁）。

《ロシア語》アントン・チェーホフ『新訳 チェーホフ短篇集』集英社、2010年9月（「あとがき」283 - 285頁）。

《ロシア語》アントン・チェーホフ『かもめ』集英社、2012年8月（訳者解説「カモメはいまでも飛んでいる」155-175頁）。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『ソラリス』早川書房（ハヤカワ文庫）、2015年4月。（27の改訂文庫版）

《ロシア語》ウラジーミル・ナボコフ『賜物』、ナボコフ『賜物 父の蝶』新潮社に所収、2019年7月。2010年河出書房新社版の改訂版。

D-2 共訳書・共編訳書

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『枯草熱』サンリオ、1979年9月（全体にわたって吉上昭三と共訳）。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『完全な真空』国書刊行会、1989年11月（工藤幸雄・長谷見一雄と翻訳を分担。全16編のうち13編の翻訳を担当）。

《ロシア語》プラート・オクジャワ『シーポフの冒険』群像社、1989年10月（全体にわたって沼野恭子との共訳。訳者解説420-429頁も共著で執筆）。

《ポーランド語》「戦後ポーランド詩集」『ポーランド文学の贈り物』恒文社、1990年1月、269-311頁（関口時正ほか13人と翻訳を分担。詩の選出も担当）。

《ポーランド語》スワヴォミル・ムロージェック『象』国書刊行会、1991年2月（長谷見一雄・吉上昭三・西成彦と翻訳を分担。収録作品42編のうち11編の翻訳を担当）。

《フランス語・チェコ語》ミラン・クンデラ『微笑を誘う愛の物語』集英社、1992年6月（千野栄一・西永良成と翻訳を分担。全7編のうち2編の翻訳を担当）。

《ロシア語》タチヤーナ・トルスタヤ『金色の玄関に』白水社、1995年4月（全体にわたって沼野恭子と共訳。訳者あとがき「『もう一つのロシア文学』の輝かしい声」283-291頁も共著で執筆）。

《ポーランド語》レシェク・コワコフスキ『ライロニア国物語』国書刊行会、1995年11月（全体にわたって芝

田文乃と共訳。訳者あとがき「ライロニアから来た道化のような哲学者」189-209頁を執筆）。

《ロシア語》ピョートル・ワイリ、アレクサンドル・ゲニス『亡命ロシア料理』未知谷、1996年9月（北川和美・守屋愛と翻訳を分担、全45章のうち3章の翻訳を担当したうえで全体を監修。訳者あとがき「誰も知らない、とても美味しいロシア」210-219頁を執筆）。

《多言語》今福龍太・四方田犬彦と共編『世界文学のフロンティア』岩波書店、1996-97年、全6巻。すべての巻にわたって共同編集。各巻の詳細は以下の通り。

第4巻『ノスタルジア』1996年11月。

第2巻『愛のかたち』1996年11月（巻頭論文「愛から出発するために」1-28頁を執筆。またドヴラトフ「これは愛じゃない」41-65頁、ルジェヴィッチ「愛1944／なんてすてき」147-150頁を翻訳）。

第1巻『旅のはざま』1996年12月。

第3巻『夢のかけら』1997年1月（巻頭論文「蕩尽された未来の後に」1-24頁を執筆。またシンボルスカ「ユートピア／奇跡の市」167-174頁、テルツ「金色のひも」257-269頁を翻訳）。

第5巻『私の謎』1997年2月。

第6巻『怒りと響き』1997年3月。

《ロシア語》ロイ・メドヴェージェフ『1917年のロシア革命』現代思潮社、1998年9月（北川和美・横山陽子の共訳。石井規衛と共同で監訳。あとがき「ソ連反体制、メドヴェージェフ、そして『あの頃』のこと」201-219頁を執筆）。

《ロシア語》アレクサンドル・グリーン『消えた太陽』国書刊行会、277頁、1999年6月（岩本和久と翻訳を分担、全15編のうち6編の翻訳を担当。訳者あとがき「ズルバガンから来た夢想の騎士」255-273頁を執筆）。

《ロシア語・英語》ウラジーミル・ナボコフ『ナボコフ短篇全集』作品社、全2巻（第1巻：2000年12月、第II巻：2001年7月。秋草俊一郎・諫早勇一・貝澤哉・加藤光也・杉本一直・毛利公美・若島正と翻訳を分担。全65編のうち13編の翻訳を担当）。

《ロシア語》エドワード・ラジンスキー『真説ラスプーチン 上・下』日本放送出版協会、2004年3月（望月哲男と共訳。下巻巻末解説「偉大な『空』としてのラスプーチン」433-441頁を執筆）。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『高い城・文学エッセイ』国書刊行会、2004年12月（巽孝之・芝田文乃・加藤有子・井上暁子と共訳。「文学エッセイ」の部の編者を担当し、収録エッセイ10編のうち4編を翻訳〔「偶然と秩序の間で 自伝」「SFの構造分析」「対立物の統一 ホルヘ・ルイス・ボルヘスの散文」「フィリップ・K・ディック にせ者たちに取り巻かれた幻視者」〕、「文学エッセイ」編者解説「レムにおける人生と批評と創作」を執筆）。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『Glos Pana/Kata 天の声／枯草熱』国書刊行会、2005年10月（深見弾・吉上昭三と共訳。訳者解説「〈九・一一以後〉にこそ読まれるべき作家レム」を執筆）。

《英語》チェスワフ・ミウォシュ『ポーランド文学史』未知谷、2006年5月（関口時正・森安達也・西成彦・長谷見一雄と翻訳を分担し、第11章729-877頁を担当）。

《ポーランド語》『チェスワフ・ミウォシュ詩集』成文社、2011年11月（関口時正との共編。編者後記「私たちのミウォシュ祭」189-194頁を執筆）。

《ロシア語》アンドレイ・シニャフスキー『ソヴィエト文明の基礎』みすず書房、2013年12月（平松潤奈・中野幸男・河尾基・奈倉有里と共訳。平松潤奈・中野幸男と訳者解説401-416頁を共著）。

《ロシア語》ウラジーミル・ナボコフ「ワルツの発明」『ナボコフ・コレクション——処刑への誘い 戯曲 事件ワルツの発明』新潮社、2018年2月、345-454頁（小西昌隆・毛利公美と翻訳を分担。毛利公美と共同で解説「ナボコフと演劇」471-477頁、また単独で『事件』作品解説478-491頁を執筆）。

D-3 編纂・監修

《ロシア語》毎日コミュニケーションズ編『外国新聞に見る日本 第2巻——国際ニュース事典1874～1895』マイナビ出版、1990年（ロシア語部分の監訳）。

《ロシア語》アネッタ・サンドレル編『タルコフスキーの世界』キネマ旬報社、1995年9月（全体にわたって監修、一部（約30頁分）翻訳を担当。監修者あとがき「タルコフスキーの帰還」552-557頁を執筆）。

《ロシア語》フォードル・ドストエフスキー『鱈 ドストエフスキー ユーモア小説集』小沼文彦・工藤精一郎・原卓也訳、講談社、2007年11月（編集を担当。解説「ドストエフスキーはユーモア作家だった！」306-329頁を執筆）。

《ロシア語》フォードル・ドストエフスキー『ポケットマスターピース10 ドストエフスキー』高橋知之・番場俊・奈倉有里・江川卓・小泉猛訳、集英社、2016年7月刊（編集を担当、高橋知之も編集協力。解説「青春と笑い ドストエフスキーとハグしあうために」780-799頁を執筆）。

《英語》ジェイムズ・キャントンほか『世界文学大図鑑』越前敏弥訳、三省堂、2016年刊（日本語版監修。「日本語版監修にあたって」351頁を執筆）。

E 論文

《日本語》

「ユーリイ・オレーシャ『羨望』の成立」『ロシア語ロシア文学』12号、72-86頁。

「アメリカ合衆国におけるロシア語教育 ハーヴァード大学の場合」『言語文化センター紀要』6号、28-42頁。

「ソビエト文学におけるドストエフスキー オレーシャとレオーノフの場合」『ドストエフスキ研究』3号、34-46頁。

「ミコワイ・センブ＝シャジンスキの逆説の世界 『ソネット』Iの文法的迷宮解読の試み」『西スラヴ学論集』1号、13-36頁。

「ゴルバチョフ政権と文学界の“グラスノスチ” 1986年のロシア文学概観」『ソ連研究』4号、29-48頁。

「東欧からの移民の天国と地獄」『G S』6号、332-348頁。

「ソビエト文学の現況と翻訳・研究'86」『文芸年鑑1987』新潮社、1987年、147-150頁。

「流謫の言語・亡命文学の栄光と悲惨」『講座20世紀の芸術5 言語の冒険』岩波書店、1988年、323-354頁。

「非スターリン化の新たな波 1987年のソビエト文学」『ゴルバチョフの社会改革』外務省欧亜局ソヴィエト連邦課、1988年、71-92頁。

「ユートピア的想像力の類型学 ロシア文学の場合」東大由良ゼミ準備委員会編『文化のモザイク 第二人類の異化と希望』緑書房、1989年、129-139頁。

「クンデラはどうしてドストエフスキーが嫌いなのか」『ユリイカ』1991年2月号、150-157頁。

「ロシア・東欧文学の現況と翻訳・研究'90」『文芸年鑑1991』新潮社、1991年、148-152頁。

「劇作家オレーシャ ドストエフスキーの長編『白痴』の脚色をめぐって」『20世紀の芸術表象における〈演劇性〉についての総合的研究』科研費報告書、表象文化論研究室、1991、49-60頁。

「煽動の図像学 革命後ソ連の政治ポスター覚書」『ルプレザンタシオン』1号、95-102頁。

「ナボコフはどれくらいロシアの作家か？」『ユリイカ』1991年10月号、100-107頁。

「ソビエト・東欧文学の現況と翻訳・研究'90」『文芸年鑑1991』新潮社、1991年、148-152頁。

「チュルリョーニスとリトアニア文化 ヨーロッパの「辺境」からやってきた幻視者」『チュルリョーニス展 分冊2』セゾン美術館、1992年、9-14頁。

「二つの星の出会い ソロヴィヨフとドストエフスキー」『交錯する言語 新谷敬三郎教授古希記念論文集』名著

普及会、1992年、217-232頁。

「ロシア・東欧文学の現況と翻訳・研究 '91」『文芸年鑑 1992』新潮社、1992年、143-147頁。

「ラトヴィア語を話す犬 ソ連邦崩壊後の民族対立と言語」『言語』1992年9月号、38-45頁。

「とどまる力と越えて行く流れ ポスト共産主義時代の民族、亡命、そして文学」『越境する世界文学』河出書房新社、1992年、47-58頁。

「宇宙の幻視者 ツィオルコフスキーとロシア・ユートピア思想の系譜」『文藝』1993年5月号、307-321頁。

「ロシア文学は一つになったのか？ 亡命文学の再評価に向けて」『窓』1993年6月号、6-14頁。

「空飛ぶ共産主義 ボグダーノフの火星ユートピア」『へるめす』43号、1-12頁。

「ユートピアからメタ・ユートピアへ」『ユリイカ』1993年12月号、158-165頁。

「ロシア文学の多民族的世界」『青丘』19号、72-79頁。

「歴史と民族の交差する場所で カントとリトアニア・ロシア文化」『現代思想』1994年3月臨時増刊号、121-128頁。

「『大きな物語』の解体 ペレストロイカからポストモダン的世界観へ」『ロシア研究』18号、88-108頁。

「転形期の前衛 花田清輝とアヴァンギャルド芸術の理論」『Slavistika』XI、666-683頁。

「文化としてのスターリン時代」へ」『思想』1996年4月号、163-180頁。

「ロシア文学における主流と非主流 文学史の新たな組み替えを目指して」川端香男里・中村喜和・望月哲男編『講座スラブの世界1 スラブの文化』弘文堂、1996年、291-318頁。

「統制から「想像力の大きい野」へ ロシアの社会変動と児童文学」『日本児童文学』1996年6月号、34-43頁。

「ロシア文学のクレオール性について」『現代思想』1997年1月号、230-237頁。

「世界の中の大江健三郎」『國文學』1997年2月臨時増刊号、198-203頁。

「世界の中の安部公房」『國文學』1997年8月号、12-18頁。

「仮死と再生 亡命ロシア人の見たアメリカ」『スラブ・ユーラシアの変動 その社会・文化的諸相（平成8年度冬期研究報告会報告集）』北海道大学スラブ研究センター、1997年6月、293-301頁。

「世界の中の日本文学 新たなアイデンティティを求めて」『アステイオン』1998年夏号、176-190頁。（英語への抄訳が *Newsletter of Committee on Intellectual Correspondence* (No.2, 1998), pp. 29-30 に掲載。）

「ロシア文学の現況と翻訳・研究 '98」『文芸年鑑 1999』新潮社、1999年、122-125頁。

「日本人のポーランド文学との出会い Spotkanie japończyków z literaturą polską」『ショパン・ポーランド・日本展』（カタログ）、日本・ポーランド国交樹立80周年および国際ショパン年記念事業編集発行、1999年、206-213頁（日本語とポーランド語のバイリンガル版。ポーランド語訳は Agnieszka Plaur による）。

「あなたは花や葉に満ちた枝のように…… ユーリイ・オレーシャの比喩と人生」小林康夫・松浦寿輝編『表象のディスカール② テキスト 危機の言説』東京大学出版会、2000年、73-100頁。

「「^{あいだ}聞」の文学？ 現代ロシア小説の新しい潮流について」『窓』2001年3月号、2-8頁。

「仲良しウサちゃん和大喧嘩 ナボコフとウィルソンの奇妙な関係」『英語青年』2001年6月号、34-36頁。

「アレクサンドル・ロトチェンコ『母の肖像』」『現代思想』2001年9月号、190-195頁。

「ナボコフの幽霊たち 生と死の境界での『明視』」『Krug/Kpyr』2002年6月号、13-16頁。

「ポスト社会主義の文学 ロシア・東欧における文化的アイデンティティの模索」『神奈川大学評論』2002、98-105頁。

「共産主義社会の日用品（ロシア） ユートピア的な夢と欠乏の現実」近藤雅樹編『二十世紀における諸民族文化の伝統と変容8 日用品の二〇世紀』ドメス出版、2003年3月、28-44頁（なお、48-49頁および287-296頁の討論にも参加）。

- 「文学 '03」日本文芸家協会編『文芸年鑑 2004』新潮社、2004年、6-9頁。
- 「日露文化交流の活性化に向けて」『NIRA 政策研究』Vol.17, No.4、53-55頁。
- 「レーニン神話の崩壊 エロフェーエフ『馬鹿と暮らして』」科研費研究成果報告書『転換期ロシアの文芸における時空間イメージの総合的研究』（14310217、研究代表者望月哲男）、2005年5月、41-50頁。
- 「レムとソルジェニーツィン 二人の現代作家に見るロシア東欧の「ユダヤ人問題」、ユダヤ人のアイデンティティ問題から見た近代国民国家の理念と現実」科研費研究成果報告書『ユダヤ人問題』（科学研究費基盤研究(B)共同研究〔代表市川裕〕研究報告書）、2006年3月、71-84頁。
- 「新たな世界文学の時代に向けて 日本文学の海外普及対策への提言」『文学の翻訳出版 諸外国の政策比較および日本文学の海外普及の現状』日本文学出版交流センター、2007年3月、8-15頁。
- 「さまざまな声のカーニバル ドストエフスキー研究と批評の流れを瞥見する」『すばる』2007年4月号、227-231頁。
- 「宇宙旅行の詩学 ソ連SFと政治イデオロギー」『文学』2007年7・8月号、64-79頁。
- 「魂の生成とユートピア探索の場としての小説『未成年』覚書」『ユリイカ』2007年11月号、118-125頁。
- 「中欧文学と地域アイデンティティ 現代文学を通じての〈中（東）欧意識〉再検討の試み」科学研究費研究成果報告書『越境する文学の総合的研究』32-51頁、2008年3月。
- 「新しい世界文学の場所へ 大きな楊文学についての小さな論」『文学界』2008年9月号、226-231頁。
- 「レーリッヒの美術」『演劇映像学 2007 報告集 1』早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」2009年、245-254頁。
- 「日本で研究する外国文学」『東京大学国際化白書』東京大学国際連携本部、2009年3月、34-35頁。
- 「枠を変える Mission Two: 世界に向き合うために」『比較地域大国論集』1号、19-27頁。
- 「さまよえる境界、捏造された幻影 中（東）欧文学の〈地詩学〉を求めて」『思想』2012年4月号、292-297頁。
- 「タスカー考 「ふさぎの虫」から「せつない」へ」『文学』2012年7・8月号、81-96頁。
- 「亡命詩人、娼婦たち、それともナボコフ 間違えたのは誰か？（『賜物』におけるある誤植をめぐる）」『れにくさ』第5号第1巻、100-121頁。
- 「失われた子供時代 ユートピアとトラウマの永遠の往復運動（チェーホフとロシアの世紀末1）」『群像』2014年5月号、64-81頁。
- 「女たち 魅惑と嘲笑（チェーホフとロシアの世紀末2）」『群像』2014年6月号、248-265頁。
- 「「あなたに捨てられた美女」カモメになりきれなかったリーカについて（チェーホフとロシアの世紀末3）」『群像』2014年7月号、244-254頁。
- 「仮面舞踏会の夜 あるいは人生が芸術を模倣することについて（チェーホフとロシアの世紀末4）」『群像』2014年8月号、306-319頁。
- 「戯れから愛へ 「下げ飾り」の行方（チェーホフとロシアの世紀末5）」『群像』2014年9月号、316-329頁。
- 「チェーホフとユダヤ人問題（チェーホフとロシアの世紀末6）」『群像』2014年10月号、237-251頁。
- 「狂気と牢獄 狂っているのは誰か？（チェーホフとロシアの世紀末7）」『群像』2014年11月号、266-281頁。
- 「小さな動物園（チェーホフとロシアの世紀末8）」『群像』2014年12月号、277-282頁。
- 「動物園的〈知〉の展開（チェーホフとロシアの世紀末9）」『群像』2015年1月号、300-308頁。
- 「霊性の幸う国で 世紀末ロシアの信仰とオカルト（チェーホフとロシアの世紀末10）」『群像』2015年2月号、262-274頁。
- 「ハーヴァード大学におけるホレス・G・ラント教授による古代教会スラヴ語の授業」『Slavistika』XXX、19-30頁。

「ナボコフと「ソ連」文学 ナボコフ『ロシア文学講義』への補遺として（ナボコフが論じなかったロシア文学）」『Krug/ K p y r』2014年7月号、42-51頁。

「革命の女たち（チェーホフとロシアの世紀末11）」『群像』2015年3月号、271-286頁。

「喜劇問題（チェーホフとロシアの世紀末12）」『群像』2015年4月号、308-324頁。

「サハリンへ！ 両義性の島、サバルタンの植民地（チェーホフとロシアの世紀末13）」『群像』2015年5月号、272-288頁。

「病の歴史（チェーホフとロシアの世紀末 最終回）」『群像』2015年6月号、223-244頁。

「ロシア人は村上春樹がお好き？——源氏物語から村上春樹まで ロシアにおける日本文学を受容」『ユーラシア研究』52号、2-7頁。

「親不孝娘の冒険、あるいは人生が芸術を模倣することについて（アヴィーロヴァとチェーホフ）」『SLAVISTIKA』XXXI、257-272頁。

「村上春樹とドストエフスキー 現代日本文学におけるロシア文学の影響をめぐって」小森陽一・曾桂秋編『村上春樹における両義性』淡江大学出版中心、2016年6月、83-108頁。

「ヤコブソンとナボコフの確執をめぐって 象、イーゴリ、スパイ」『SLAVISTIKA』XXXII、41-60頁。

「特別企画 カズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞と世界文学 特集の主旨」『学術の動向』2018年2月号、72頁（72-87頁の特別企画全体の編集も担当）。

「聖書とウィスキー ロシア人はフォークナーをどう読んできたか」『フォークナー』20号、1-14頁。

《英語》

“Evergreen with Envy: Jurij Olesha and Fantastic Literature,” 『外国語科研究紀要』34-4 (1986): 23-53.

“Japanese Literature Across Borders,” *Japanese Book News* 19 (1997): 3-4.

“Aspects of Post-Utopian Imagination: The Cases of Brodsky, P’etukh, Petrushevskaya, and Makanin,” *Slavistika* XIV (1998): 52-62.

“Is There Such a Thing as Central (Eastern) European Literature? An Attempt to Reconsider ‘Central European’ Consciousness on the Basis of Contemporary Literature,” *Slavic Eurasian Studies*, No.15 (2007): 121-136.

“Toward a New Age of World Literature: The Boundary of Contemporary Japanese Literature and Its Shift in the Global Context,” 『れにくさ』1 (March 2009): 188-203.

“The River as a Metaphor for Human Experience: Adam Mickiewicz’s ‘Nad wodą wielką i czystą’ in Comparison with Tadeusz Różewicz’s ‘Lyriki lozańskie’ and Czesław Miłosz’s ‘Rzeki,’” 『西スラヴ学論集』No.14 (April 2011): 71-88.

“The Seagull Goes to the Cosmos, and Haruki Murakami Goes to Sakhalin,” *Japanese Slavic and East European Studies*, 35 (October 2014): 5-12.

“The Role of Russian Literature in the Development of Modern Japanese Literature from the 1880s to the Present: Some Remarks on Its Peculiarities” 『れにくさ』6 (March 2016): 333-341.

《ロシア語》

Судьба искусства Юрия Олеши: его жизнь в метафорах // Новый журнал. 1981. № 145. С . 59-76. (Rimgaila Salys, ed., *Olesha’s Envy: A Critical Companion*, Northwestern University Press, 1999 の Bibliography, p.146 で “Best article on Olesha’s metaphors” と評される。)

Утопическое воображение в русской литературе в начале XX века // *Japanese Contributions to the Tenth International Congress of Slavists: Sophia, Sept. 1988* (1988): 105-126.

Двойственность и однолинейность: становление личности Аркадия в романе Достоевского «Подросток» // *Japanese*

Slavic and East European Studies 10 (1989): 7-30.

Комментарий к рассказу Юрия Олеши «Любовь»: Опыт медленного чтения // 『外国語科研究紀要』(東京大学教養学部外国語科) 39-5 (1992): 49-68.

Набоков и Олеша: сравнительный подход к их искусству видеть мир // *Japanese Contributions to the XIth International Congress of Slavists: Bratislava, Aug.-Sept.1993*: 67-92.

Масштаб вечности: мотивы солнца и луны в романе Вулгакова «Мастер и Маргарита» // 『20世紀ロシア・ソビエト文学におけるユートピアとアンチ・ユートピア』(科研費報告書, 東京大学教養学部ロシア語教室, 1994) : 7-26.

О не совсем русской поэтике Довлатова // *Slavistika* XIII (1997): 151-162.

Мои встречи (и невстречи) с Сергеем Донатовичем. Японская довлатовиана // Сергей Довлатов: творчество, личность, судьба / Под ред. А.Ю. Арьева. СПб., 1999. С. 224 - 231.

Тюкан Сесэцу: Пелевин, Акунин и Мураками успешно заполняют лауну // *Exlibris NG* (Moscow), Dec. 7, 2000, p. 3. [以下は、タイトルが少し変更されているが、ほぼ同じ内容の論文の再録である。Пелевин, Акунин и Мураками: Писатели, заполняющие «лауну» между серьезной и массовой литературой. *Slavistika* XVI/XVII. 2000/2001. С. 197-210.]

Граница японской литературы и ее сдвиги в мировом контексте // «Иностранная литература» 2002 № 8. С. 242-248.

Японский язык на пути к мировой литературе // «Путь кисти и меча» 2002. № 3. С. 44-45.

«Женщины как четыре квадранта мировоззрения: Метонимическое средство в «Спекторском» и «Повести Пастернака» // *SLAVISTIKA* XXVII. 2012. С. 73-102.

Женщина как метонимическое средство представления мира: жинеские фигуры в «Спекторском» и «Повести Пастернака» // *Лезик, књижевност, култура: Новици Петковићу у част: зборник радова, Special Issue 34(2012): 757-785.*

Харуки против Карамзовых: Влияние «Великой русской литературы» на современную японскую литературу // *ヴェルボンド / Velbond*. 2012. № 1. С. 170-189.

Переводы В. В. Набокова и А. П. Чехова на японский язык: о необходимости нового перевода классики // *Found in Translation: Transformation, Adaptation and Cross-Cultural Transfer*, 2016(195-200).

К изучению истории «истории русской литературы» в Японии. Конспект доклада // 『れにくさ』 7 (March2017): 160-167.

《ポーランド語》

"Przeciw utopii powszechnego szcz[cia. O poezji Wislawy Szymborskiej," *Slavistika* XII (1997): 60-66.

"List z Tokio. Japońskie ścieżki," *Literatura na świecie*, Nr. 1-2-3/2002, str. 407-414. (ポーランド語訳 Jan Filipek)

F 書評

Victor Terras, ed., *Handbook of Russian Literature*, Yale University Press, 1985 (『ロシア語ロシア文学研究』 18号、77-82頁)。

川崎渕『英雄たちのロシア』岩波書店、1999年3月刊(『ロシア語ロシア文学研究』 32号、202-204頁)。

アンドレイ・シニャーフスキイ『プーシキンとの散歩』島田陽訳、群像社、2001年6月刊(『ロシア語ロシア文学研究』 34号、160-162頁)。

桑野隆『バフチン 新版』岩波書店、2002年11月刊(『毎日新聞』 2003年2月2日)。

池澤夏樹・文、本橋成一・写真『イラクの小さな橋を渡って』光文社、2003年1月刊(『毎日新聞』 2003年3

月2日)。

ジョン・レノン『らりるれレノン』佐藤良明訳、筑摩書房、2002年12月刊(『毎日新聞』2003年3月30日)。

ヴェーラ・フレーブニコワ『ティルとネリ』北川和美訳、未知谷、2003年3月刊(『毎日新聞』2003年6月15日)。

村上春樹編訳『バースデイ・ストーリーズ』中央公論新社、2002年刊(『中央公論』2003年3月号、297-298頁)。

「アンケートによるベスト翻訳書2002 翻訳書アンケート 私のベスト10」『eトランス』(2003年4月号)、60頁(『チェゲムのサンドロおじさん』『透明な対象』『シュニトケとの対話』『バフチン言語論入門』『不埒な人たち』『世界は終わらない』『鰐の涙 ムロージェク短編集』『新版 夜と霧』『死刑執行人 モスクワ市警殺人分析官アナスタシア』『ソネチカ』について)。

吉村昭著『大黒屋光太夫 上・下』毎日新聞社、2003年2月刊(『毎日新聞』2003年4月6日)。

J・D・サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』村上春樹訳、白水社、2003年4月刊(『毎日新聞』2003年5月4日)。

北原保雄監修『岩波 日本語使い方考え方辞典』岩波書店、2003年5月刊(『毎日新聞』2003年6月1日)。

三浦俊彦『シンクロナイズド・』岩波書店、2003年4月刊(『毎日新聞』2003年7月6日)。

イワン・ブーニン『ブーニン作品集3 たゆたう春／夜』岩本和久・吉岡ゆき・橋本早苗・望月恒子・田辺佐保子・坂内知子訳、群像社、2003年7月刊、『ブーニン作品集5 呪われた日々 チューホフのこと』佐藤祥子・利府佳名子・尾家順子訳、群像社、2003年7月刊(『毎日新聞』2003年8月3日)

山崎佳代子『そこから青い闇がささやき』河出書房新社、2003年7月刊(『毎日新聞』2003年8月31日)。

池澤夏樹『静かな大地』朝日新聞社、2003年9月刊(『朝日新聞』2003年10月2日)。

リカルド・オリツィオ『独裁者の言い分』松田和也訳、柏書房、2003年9月刊(『毎日新聞』2003年10月5日)。

「読書目録」『すばる』(2003年11月号)、454-455頁(桑野隆『バフチンと全体主義』、小川洋子『博士の愛した数式』、飯野公一・恩村由香子・杉田洋・森吉直子『新世代の言語学』について)。

阿部和重『シンセミア 上・下』朝日新聞社、2003年10月刊(『毎日新聞』2003年11月9日)。

「読書目録」『すばる』(2003年10月号)、326-327頁(山口昌男『山口昌男ラビリンズ』、アーサー・ビナード『空からやってきた魚』『翻訳のココロ』について)。

夏石番矢『世界俳句入門』沖積舎、2003年11月刊(『毎日新聞』2003年12月7日)。

亀山郁夫『熱狂とユーフォリア』平凡社、2003年11月刊(『四国新聞』2003年12月20日、『北国新聞』2003年12月21日)。

「読書目録」『すばる』(2003年12月号)、420-421頁(山口翼編『日本語大シソーラス』、富山太佳夫『文化と精読 新しい文学入門』、河島みどり『リヒテルと私』について)。

「2003年 今年の3冊」(『毎日新聞』2003年12月21日)(山口翼編『日本語大シソーラス 類語検索大辞典』、多和田葉子『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』、ミルチャ・エリアーデ『エリアーデ幻想小説全集 第1巻』住谷春也編訳・直野敦訳について)。

「2003年単行本・文庫本ベスト3+世界の町に一人ずつ+トンカツにはキャベツ」『リテレーン別冊19 ことし読む本いち押しガイド2004』メタログ、2003年12月、22-23頁(桑野隆『バフチンと全体主義 20世紀ロシアの文化と権力』、山崎佳代子『そこから青い闇がささやき』、ヴィクトル・ペレーヴィン『DPP(nn)』について)。

野崎欽『谷崎潤一郎と異国の言語』中公文庫、2004年4月刊(『Language, Information, Text』11巻1号、199-202頁)。

ルキヤネンコ『ナイト・ウォッチ』法木綾子訳、バジリコ、2005年12月刊(『毎日新聞』2006.1.22)。

亀山郁夫『大審問官スターリン』岩波書店、2006年2月刊（『毎日新聞』2006年2月19日）。

末木文美士『仏教 vs. 倫理』ちくま新書、2006年2月刊（『毎日新聞』2006年3月19日）。

松浦寿輝『方法叙説』講談社、2006年2月刊（『新潮』2006年5月号、326-327頁）。

アフナーシェフ『ロシア好色昔話大全』中村喜和訳、平凡社、2006年3月刊（『毎日新聞』2006年4月23日）。

熊野純彦『西洋哲学史 古代から中世へ』岩波書店、2006年4月刊（『毎日新聞』2006年5月28日）。

エドワード・サイド『故国喪失についての省察 1』大橋洋一ほか訳、みすず書房、2006年4月刊（『日本経済新聞』2006年6月4日）。

小菅正夫・岩野俊郎『戦う動物園』中央公論新社、2006年7月刊（『毎日新聞』2006年8月6日）。

クルコフ『大統領の最後の恋』前田和泉訳、新潮社、2006年8月刊（『毎日新聞』2006年9月10日）。

アン・アプルボーム『グララグ ソ連集中収容所の歴史』白水社、2006年7月刊（『毎日新聞』2006年10月15日）。

小野正嗣『森のはずれで』文藝春秋、2006年6月刊（『新潮』2006年9月号、264-265頁）。

ゴーゴリ『鼻／外套／査察官』浦雅春訳、光文社古典新訳文庫、2006年11月刊＋トルストイ『イワン・イリイチの死／クロイツェル・ソナタ』望月哲男訳、光文社古典新訳文庫、2006年10月刊（『毎日新聞』2006年11月19日）。

多和田葉子『海に落とした名前』新潮社、2006年11月刊（『新潮』2007年2月号、260-261頁）。

多和田葉子『アメリカ 非道の大陸』青土社、2006年11月刊（『毎日新聞』2007年1月7日）。

ヴィクトル・ペレーヴィン『恐怖の兜』中村唯史訳、角川書店、2006年12月（『毎日新聞』2007年2月11日）。

青山七恵『ひとり日和』＋綿矢りさ『夢を与える』、ともに河出書房新社、2007年2月刊（『毎日新聞』2007年3月11日）。

米原万里『発明マニア』毎日新聞社、2007年3月刊（『毎日新聞』2007年4月15日）。

ダニロ・キシユ『砂時計』奥彩子訳、松籟社、2007年3月刊（『毎日新聞』2007年5月13日）。

富岡多恵子『湖の南』新潮社、2007年4月刊（『群像』2007年6月号、394-395頁）。

平井正『オリエント急行の時代 ヨーロッパの夢の軌跡』中央公論新社、2007年4月刊（『論座』2007年6月号、315頁）。

野崎欽『われわれはみな外国人である 翻訳文学という日本文学』五柳書院、2007年5月刊（『毎日新聞』2007年6月24日）。

ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟（全4巻＋エピローグ別巻）』亀山郁夫訳、光文社、2007年7月刊（『毎日新聞』2007年7月29日）。

松浦寿輝『川の光』中央公論新社、2007年7月刊（『毎日新聞』2007年8月26日）。

エドワード・ラジンスキー『アレクサンドルⅡ世暗殺（上・下）』望月哲男・久野康彦訳、NHK出版、2007年8月刊（『毎日新聞』、2007年9月30日）。

レイ・ブラッドベリ『緑の影、白い鯨』川本三郎訳、筑摩書房、2007年10月刊（『毎日新聞』2007年11月4日）。

ジャック・ケルアック『オン・ザ・ロード』青山南訳、河出書房新社、2007年10月刊（『毎日新聞』2007年12月16日）。

ヤン・パトチカ『歴史哲学についての異端的論考』石川達夫訳、みすず書房、2007年9月刊（『毎日新聞』2008年1月20日）。

小野正弘編『日本語オノマトベ辞典』小学館、2007年10月刊（『毎日新聞』2008年3月2日）。

トルーマン・カポーティ『ティファニーで朝食を』村上春樹訳、新潮社、2008年2月刊（『毎日新聞』2008年3

月 30 日)。

桐野夏生『東京島』新潮社、2008 年 5 月刊 (『毎日新聞』、2008 年 6 月 8 日)。

平野啓一郎『決壊』新潮社、2008 年 6 月刊 (『毎日新聞』、2008 年 7 月 13 日)。

川村湊『文芸時評 1993-2007』水声社、2008 年 7 月刊 (『毎日新聞』2008 年 8 月 17 日)。

細川周平『遠きにありて思うもの 日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』みすず書房、2008 年 6 月刊 (『毎日新聞』2008 年 9 月 28 日)。

高野陽太郎『「集団主義」という錯覚』新曜社、2008 年 6 月刊 (『毎日新聞』2008 年 10 月 26 日)。

高野文緒『赤い星』ハヤカワ書房、2008 年 8 月刊 (『毎日新聞』2008 年 11 月 16 日)。

今福龍太『群島—世界論』岩波書店、2008 年 11 月刊 (『毎日新聞』2009 年 1 月 11 日)。

エステルハージ・ペーテル『ハーン=ハーン伯爵夫人のまなざし』松籟社、2008 年 11 月刊 (『毎日新聞』2009 年 2 月 15 日)。

竹内整一『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』筑摩書房、2009 年 1 月刊 (『毎日新聞』2009 年 3 月 15 日)。

津島佑子『電気馬』新潮社、2009 年 3 月刊 (『毎日新聞』2009 年 4 月 19 日)。

鹿島田真希『ゼロの王国』講談社、2009 年 4 月刊 (『毎日新聞』2008 年 5 月 24 日)。

村上春樹『1Q84 Book1, 2』新潮社、2009 年 5 月刊 (『毎日新聞』2008 年 6 月 14 日)。

辻原登『許されざる者』毎日新聞社、2009 年 6 月刊 (『毎日新聞』2009 年 7 月 12 日)。

加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』朝日出版社、2009 年 7 月刊 (『毎日新聞』2009 年 8 月 16 日)。

ジョージ・オーウェル『一九八四年』高橋和久訳、早川書房、2009 年 7 月 (『毎日新聞』、2008 年 9 月 13 日)。

キシユ、カルヴィーノ『庭、灰 見えない都市 世界文学全集 2-06』山崎佳代子・米川良夫訳、河出書房新社、2009 年 9 月刊 (『毎日新聞』2009 年 10 月 25 日)。

村上春樹『1Q84』新潮社、2009 年 5 月刊 (『JLT2010』(27号)、94-99 頁。英文の書評)。

加藤有子『ブルーノ・シュルツ 目から手へ』、水声社、2012 年 4 月刊 (『表象』(7号)、282-286 頁)。

エラスムス『痴愚神札賛 ラテン語原典訳』杏掛良彦訳、中央公論新社、2014 年 1 月刊 (『毎日新聞』2014 年 2 月 23 日)。

村上春樹『女のいない男たち』文藝春秋、2014 年 4 月刊 (『毎日新聞』2014 年 5 月 18 日)。

今福龍太『書物変身譚』新潮社、2014 年 6 月刊 (『毎日新聞』2014 年 7 月 20 日)。

パトリク・オウジェドニク『エウロペアナ』阿部賢一・篠原琢訳、白水社、2014 年 8 月刊 (『毎日新聞』2014 年 9 月 21 日)。

ロナルド・ドーア『幻滅 外国人社会学者が見た戦後日本 70 年』藤原書店、2014 年 11 月刊 (『毎日新聞』2015 年 1 月 25 日)。

ウラジミール・ソローキン『氷』松下隆志訳、河出書房新社、2015 年 1 月刊 (『毎日新聞』、2015 年 3 月 15 日)。

内田樹編『日本の反知性主義』晶文社、2015 年 3 月刊 (『毎日新聞』、2015 年 5 月 3 日)。

村上春樹『職業としての小説家』スイッチ・パブリッシング、2015 年 9 月刊 (『毎日新聞』2015 年 10 月 11 日)。

亀山郁夫『新カラマゾフの兄弟 上・下』河出書房新社、2015 年 11 月刊 (『毎日新聞』2015 年 11 月 29 日)。

温又柔『台湾生まれ 日本語育ち』白水社、2016 年 1 月刊 (『毎日新聞』2016 年 1 月 31 日)。

ウンベルト・エーコ『プラハの墓地』橋本勝雄訳、東京創元社、2016 年 2 月刊 (『毎日新聞』2016 年 3 月 27 日)。

J・M・クッツェー『イエスの幼子時代』鴻巣友季子訳、早川書房、2016 年 6 月刊 (『日本経済新聞』2016 年 8 月 14 日)。

エマニュエル・キャレル『リモノフ』土屋良二訳、中央公論新社、2016年4月（『中央公論』2016年9月号、236-237頁）。

川上弘美『森へ行きましょう』日本経済新聞出版社、2017年10月刊（『新潮』2018年2月号、332-333頁）。

黒田龍之介『物語を忘れた外国語』新潮社、2018年4月刊（『週刊現代』2018年6月2日）。

阿部公彦『史上最悪の英語政策 ウソだらけの「4技能」看板』ひつじ書房、2017年12月刊、鳥飼玖美子『英語教育の危機』筑摩書房、2018年1月刊（『毎日新聞』2018年1月21日）。

西成彦編訳『世界イディッシュ選』岩波書店、2018年1月刊（『毎日新聞』2018年3月11日）。

フィリップ・サンズ『ニュルンベルク合流 「ジェノサイド」と「人道に対する罪」の起源』園部哲訳、白水社、2018年4月刊（『毎日新聞』2018年4月29日）

多和田葉子『地球にちりばめられて』講談社、2018年4月刊+ダニエル・ヘラー=ローゼン『エコリアス』関口涼子訳、みすず書房、2018年6月刊（『毎日新聞』2018年6月10日）。

『ミセス9月号』（『毎日新聞』マガジン評、2018年8月19日）。

J・M・クッツェー『モラルの話』くぼたのぞみ訳、人文書院、2018年5月刊（『毎日新聞』2018年9月23日）。

中野理恵『すきな映画を仕事にして』現代書館、2018年10月刊（『毎日新聞』2018年11月25日）。

岡真理『ガザに地下鉄が走る日』みすず書房、2018年11月刊（『毎日新聞』2018年12月16日）。

マイケル・エメリック『てんてこまい』五柳書院、2018年8月刊+岡井隆・関口涼子『注解するもの、翻訳するもの』思潮社、2018年10月刊+木村朗子『その後の震災後文学論』青土社、2018年1月刊（『毎日新聞』2018年12月16日、「2018 この3冊」）。

『三田文学 No.136 冬季号』（『毎日新聞』マガジン評、2019年1月27日）。

西成彦『外地巡礼 「越境的」日本語文学論』みすず書房、2018年1月刊（『読売新聞』2019年2月2日、第70回読売文学賞選評）。

*このほか、朝日新聞にて文芸季評を連載（2003-2005）。『毎日新聞』書評委員として、年間6-7本、文学・人文関係書の書評を『毎日新聞』日曜書評欄「今週の本棚」に掲載（1995年から現在）。新聞三社連合配信各紙（東京新聞、中日新聞、北海道新聞、西日本新聞）に毎月文芸時評を連載（2004年12月-2011年12月）。

また、国際交流基金編『Worth Sharing』Vol.1-5（2013-2017）の推薦著作選考委員を尾崎真理子・張競・野崎欽と務め、推薦作の紹介を一部執筆したほか、Vol.1『日本の青春』とvol.5『過去との対話、未来への道しるべ』では序文も執筆。

G 解説

「ゴンブローヴィッチ」『集英社ギャラリー世界の文学』第12巻、集英社、1989年12月、1077-1092頁。

「ゴーゴリアン後藤明生 この何とも名づけにくい言葉の才能」後藤明生『笑いの方法』福武文庫、1990年11月、294-305頁。

「文体からの亡命者」、島田雅彦『語らず歌え』福武文庫、1991年8月、257-268頁。

「ニーナ・ベルベーロワ、亡命ロシア文化最後の花」ニーナ・ベルベーロワ『伴奏者』高頭麻子訳、河出書房新社、1993年6月、147-167頁。

「砂漠と辺境の詩学」安部公房『砂漠の思想』講談社学芸文庫、1994年1月、414-430頁。

「転形期の前衛 花田清輝とアヴァンギャルド芸術の理論」花田清輝『アヴァンギャルド芸術』講談社学芸文庫、1994年10月、319-336頁。

「いま・こと永遠の間で」池澤夏樹『マリコ／マリキータ』文春文庫、1994年4月、224-237頁。

「起源と終末の間で」椎名誠『水域』講談社文庫、1994年3月、279-287頁。

「さあ、この桁外れのワンダーランドへ！ ロシア的想像力の原点としてのプリーナ」中村喜和編訳『ロシア英雄物語』平凡社ライブラリー、1994年11月、278-286頁。

「帝国の「辺境」、その光と影」ヤーン・クロス『狂人と呼ばれた男』沢崎冬日訳、日本経済新聞社、1995年10月、433-451頁。

「「謎とき」のロマン フィクションとノンフィクションの境界を超えて」『松本清張全集 64 両像 森鷗外・暗い血の旋律』文藝春秋社、1996年1月、461-467頁。

「始まりと終わりのタルコフスキー」馬場朝子編『タルコフスキー 若き日、亡命、そして死』青土社、1997年7月、215-235頁。

「社会主義の崩壊と文学的想像力」クリスタ・ヴォルフ『残るものは何か？』保坂一夫訳、恒文社、1997年7月、165-177頁。

「わたしには、わたしにちょうどの背の高さしかこの世にはない 詩人の「一人称」について」長田弘『一人称で語る権利』平凡社ライブラリー、1998年7月、231-242頁。

Сибя Рётаро и Россия// Сибя Рётаро. О России: Изначальный облик Севера. М., 1999. С. 7-10. (司馬遼太郎『ロシアについて』ロシア語訳の解説)

「マリーニナと現代ロシアの推理小説」アレクサンドラ・マリーニナ『盗まれた夢』吉岡ゆき訳、作品社、1999年10月、357-364頁。

「新しい世界文学に向けての越境」デビット・ゾペティ『いちげんさん』集英社文庫、1999年11月、208-215頁。

「シェンケヴィッチと『クオ・ヴァディス』」シェンケヴィッチ『クオ・ヴァディス 下』吉上昭三訳、福音館書店、2000年6月、511-529頁。

「十年後のドヴラートフ ロシア文学で一番まともな人間はすでに歴史になった」セルゲイ・ドヴラートフ『かばん』守屋愛訳、成文社、2000年12月、207-221頁。

「人間を壊さずに作っていく方法について」大江健三郎『私という小説家の作り方』新潮文庫、2001年4月、189-196頁。

「CRITIQUE2 ケシロフスキを生んだ激動のポーランド現代史」『ケシロフスキ・コレクション』(映画パンフレット)、ビターズ・エンド、2003年3月。

「現代日本によみがえる『ゴロヴリョフ家の人々』 「ロシア文学で最も陰惨な小説」に新しい生命を吹き込んだ〈永井マヅク〉」『ゴロヴリョフ家の人々』(劇場パンフレット)、2003年6-7月、22-23頁。

「聖なるものの顕現としての文学 ルーマニアの物語る〈宇宙羊〉を称えて」ミルチャ・エリアーデ『エリアーデ幻想小説全集 第1巻』住谷春也・直野敦訳、作品社、2003年7月、523-547頁。

「「内なる辺境」とクレオール 安部公房の後期作品」『没後一〇年安部公房展』(パンフレット)、世田谷文学館、2003年9月、45-49頁。

「現代に蘇るトルストイの『復活』 その〈反時代的〉なラディカルさについて」『『復活』パンフレット』、アルシネテラン、2003年、6-7頁。

「悲しみを濾過して、「まだ生まれて来ない者」たちに道を開く」大江健三郎『取り替え子』講談社文庫、2004年4月、378-388頁。

「解説」高村薫『照柿 下』講談社文庫、2006年8月、321-329頁。

「ドイツ・ロシアの大いなる幻想の沃野へ」エーヴェルスほか『怪奇小説傑作集 5 ドイツ・ロシア編』東京創元社、2006年8月、433-444頁。

「中欧の文化とチェコの精神」『季刊アートマガジン AVANTGARDE』(1号)、81-83頁。

「失われなかったロシア」を求めて」ボリス・アクーニン『アキレス将軍殺人事件』沼野恭子・毛利公美訳、2007年2月、岩波書店、427-431頁。

「ロシア芸術の奇跡 19世紀のリアリズムとその〈広がり〉について」『国立ロシア美術館展（パンフレット）』東京都美術館、2007年4月、34-38頁。

「ソ連反体制から世界市民へ 『人生の祭典』の背景にある激動のロシア現代史」アレクサンドル・ソクーロフ監督『ロストロポーヴィチ 人生の祭典（映画パンフレット）』、2007年4月、9頁。

「『文学2007』解説」日本文藝家協会編『文学2007』講談社、2007年5月、1-11頁。

「『ユーリーとソーニャ』の著者とその時代」アンリ・トロワイヤ『ユーリーとソーニャ』山脇百合子訳、福音館書店、2007年6月、248-254頁。

「井坂幸太郎の「精度」について」井坂幸太郎『死神の精度』文春文庫、2008年2月、338-345頁。

「二つの「地獄」の間で」リービ英雄『千々にくだけで』講談社文庫、2008年9月、268-276頁。

「原点にして究極 フレーブニコフに至る（帰る）長い道」亀山郁夫『甦るフレーブニコフ』平凡社ライブラリー、2009年4月、627-653頁。

「空から人が降ってくる」円城塔『オブ・ザ・ベースボール』文春文庫、2012年4月、195-205頁。

「『西洋文学』から『世界文学』へ 事典というにぎやかな祝祭の場で」桑原武夫監修『西洋文学事典』ちくま学芸文庫、2012年4月、581-590頁。

「神なき現代人に宛てられた可笑しくも美しい手紙」鹿島田真希『ゼロの王国 下』講談社文庫、2012年、6月370-381頁。

「精神と物質が直接出会う場へ」中沢新一『東方的』講談社学術文庫、2012年10月、365-376頁。

「魂が飛び、虎が憑き、鬼が云う 多和田葉子と言葉の魔法」多和田葉子『飛魂』講談社文芸文庫、2012年11月、238-249頁。

「動物学の教授には象を呼べ 大学教師としてのナボコフ」ウラジーミル・ナボコフ『ナボコフの文学講義 下』野島秀勝訳、河出文庫、2013年1月、409-429頁。

「ダニロ・キシユと山崎佳代子 戦争と、夏草と、世界文学の出会いについて」ダニロ・キシユ『若き日の哀しみ』山崎佳代子訳、創元ライブラリー、2013年9月、212-221頁。

「短編「かえるくん、東京を救う」について」『村上春樹「かえるくん、東京を救う」英訳完全読解』、NHK出版、2014年7月、8-12頁。

「若者よ、混乱の向こう側に未来をつかみとれ」池澤夏樹『氷山の南』文春文庫、2014年9月、588-594頁。

「短編「象の消滅」について」『村上春樹「象の消滅」英訳完全読解』NHK出版、2015年1月、8-12頁。

「異星という形而上的な地獄 ストルガツキー兄弟のSFからゲルマンの映画へ」、アレクセイ・ゲルマン監督『神々のたそがれ』（映画プログラム）、株式会社アイ・ヴィー・シー、24-28頁、2015年3月。

「差違と普遍性 現代チベット文学が切り拓くもの」タクブンジャ『ハバ犬を育てる話』東京外国語大学出版会、2015年3月、255-263頁。

「文学2014年（概観）」日本文藝家協会編『文藝年鑑 2015』新潮社、2015年6月、8-15頁。

「美酒と奇想 東欧ポストモダンの旗手、パヴィチを称えて」ミロラド・パヴィチ『ハザール事典』（男性版および女性版）、2015年11月、457-463頁。

「生を全面的に更新すること 政治の革命と芸術の革命」『神奈川大学評論』（86号）、2-3頁。

「ロシア文学」本の雑誌編集部編『別冊本の雑誌19 古典名作』本の雑誌社、2017年8月、27-31頁。

「『アダプテーション論的転回』に向けて」小川公代・村田真一・吉村和明編『文学とアダプテーション ヨーロッパの文化的変容』春風社、2017年10月、5-12頁。

「小説が書けないと泣いていたKさんへ だったら『鼻に挟み撃ち』を読んでごらん」いとうせいこう

『鼻に挟み撃ち』集英社文庫、2017年11月、173-182頁。

「ジョージア映画と岩波ホールに乾杯！」ナナ・エクフティミシュヴィリ監督『花咲くころ』（映画パンフレット）、2018年2月、2-3頁。

「日本文学のいま、ここ 世界文学共和国は可能か？」日本文藝家協会編『文学2018』講談社、2018年4月、1-11頁。

「愛なき世界の悲劇と希望 『ラブレス』の翻訳不可能性と普遍性」、アンドレイ・ズビャギンツェフ監督『ラブレス』（映画プログラム）、2018年4月。

「スタニスワフ・レムと『ソラリス』について 藤倉大氏のオペラ日本上演に寄せて」藤倉大『歌劇 ソラリス 全幕』（劇場プログラム）、東京芸術劇場、2018年10月、ページ数はないが表紙裏を1頁とした場合6-10頁に相当。

「もっと『グレート・コメット』を知ろう！」、デイブ・マロイ作『ナターシャ・ピエール・アンド・ザ・グレート・コメット・オブ・1812』（ミュージカルプログラム）、2019年1月。

「彼方の光に導かれて、あるいは「走れ、オザワ！」」小澤裕之『理知のむこう ダニエル・ハルムスの手法と詩学』未知谷、2019年3月、355-365頁。

「《外套》の中にはまりこんで ゴーゴリの魔力とノルシュテイン」才谷遼監督『ノルシュテイン《外套》をつくる』（映画プログラム）、2019年3月。

「世界中の舞台でカモメは飛び続ける、そして日本でも」チェーホフ作『新国立劇場 演劇2018/2019 シーズンかもめ』（劇場プログラム）、2019年4月、24-25頁。

「響き渡る魔法のコラス ソロモン・ヴォルコフにおける文化と政治」ソロモン・ヴォルコフ『20世紀ロシア文化全史 政治と芸術の十字路で』今村朗訳、河出書房新社、2019年4月、361-371頁。

「境界を越え、歴史に抗って生きたロシアの黒人」ウラジーミル・アレクサンドロフ『かくしてモスクワの夜はつくられ、ジャズはトルコにもたらされた——二つの帝国を渡り歩いた黒人興行師フレデリックの生涯』竹田円訳、白水社、2019年10月、309-318頁。

H 評論・エッセイ

「結晶した内部 バラード・ランド再訪」『ユリイカ』1986年6月号、102-109頁。

「詩でしかないのに、詩以上の何かでもある 現代ポーランド詩の純粹さと不純さについて」『現代詩手帖』1990年10月号、74-79頁。

「新しくないぞ、私は ソ連の「新しい文学」と現実のこみいった関係について」『現代詩手帖』1991年5月号、56-61頁。

「世界との本当の出会いに向けて 大江健三郎と『世界文学』」『群像 特別編集 大江健三郎』1995年4月大江健三郎特集号、51-57頁。

「翻訳をめぐる七つの非実践的な断章」『早稲田文学』1995年5月号、76-83頁。

「世界文学への視点」『早稲田文学』1996年2月号、18-28頁。

「象と小説と高邁な理念について（人文学は、いま⑦）」『UP』1996年5月号、1-5頁。

「枠を変える ロシア文化の現在」『現代思想』1997年4月号、40-53頁。

「レーリッヒとロシア文化の地平1 レーリッヒの謎」『i s』1997年9月号、50-53頁。

「ポスト・ガルシア＝マルケスの世界文学」『世界』1997年10月号、104-108頁。

「レーリッヒとロシア文化の地平2 失われた精神宇宙を求めて」『i s』1997年12月号、66-69頁。

「レーリッヒとロシア文化の地平3 帝国・古代・辺境」『i s』1998年3月号、56-59頁。

「レーリッヒとロシア文化の地平4 チュルリョーニス・サリヤン・ピロスマニ」『i s』1998年6月号、76-79頁。

「パデレフスキからシマノフスキへ 音楽における「ポーランド性」を求めて」『フィルハーモニー』1998/99年、vol. 2、27-32頁。

「レーリッヒとロシア文化の地平5 霊の国の幻視者たち」『i s』1999年3月号、88-94頁。

「イワンの国の魔法使いたち」『アエラ・ムック 童話学がわかる』1999年3月、10-13頁。

「国民詩人は『現代の汽船』から放り出されたのか？ プーシキンと現代ロシア文学」『プーシキン』（生誕200周年記念祭実行委員会、1999年6月）、28-29頁。

「レーリッヒとロシア文化の地平6 聖地シャンバラを求めて」『i s』1999年9月号、92-98頁。

「魂のこをする場所としての小説」『文学界』1999年10月号、136-146頁。

「レーリッヒとロシア文化の地平7 深まる謎」『i s』2000年3月号、92-98頁。

「英語中心主義と脱領域性の間で 日本の「英学」の現状に対する若干の批判的感想」『文学』2000年5・6月号、45-49頁。

「ロシア語版『新しい日本小説』ができるまで 現代という両刃の剣にかかわることの意味」『国際交流』2001年7月号、92-96頁。

「座談会 和歌研究への感謝と期待——歌の翼にのって世界へ」『文学』2002年3・4月号、25-46頁（杉橋陽一、クリステワ・ツベタナ・渡辺泰明との座談会の司会を務める）。

「レーリッヒとロシア文化の地平8 レーリッヒと日本」『i s』2002年3月号、93-99頁。

「小さなロシアから大きなウクライナへ」『明治大学一般教養部附属研究所紀要』26号、93-107頁。

「ユートピアの陶酔と二日酔い シャガールからカバコフへ」『美術手帖』2002年5月号、146-149頁。

「そして偉大なるロシア文学は続く 古典の現代的パロディをめぐる」『新潮』2003年1月号、296-306頁。

「モスクワ日記から」『新潮』2003年2月号、258-261頁。

「アイギ、グバイドゥーリナとの対話」『新潮』2003年4月号、288-291頁。

「巻頭随筆 モスクワで酒を呑むのも楽じゃない」『外交フォーラム』2003年5月号、9頁。

「村上春樹版『ライ麦畑』に「3つの仕掛け」があった！」『週刊ポスト』2003年5月30日号、52-53頁。

「変でしょうか、私（日本語）って？ 特殊と普遍の間で揺れながら」『大航海』No.46、新書館、58-65頁。

「第72回国際ペン・ベルリン大会印象記」『P.E.N.』Vol. 376、16-19頁。

「文学'02」『文藝年鑑2003』新潮社、2003年7月、6-9頁。

「疾走するタトゥ、犬を喰うグリシコヴェツ」『新潮』2003年7月号、312-315頁。

「ロシア文学の民族的多様性を代表する作家がそろいました」『NHK ウイークリーステラ』2003年9/6-9/12号、70-71頁。

「不自由の果てへの旅」『図書』2003年9月号、48-50頁。

「中欧文学飛び歩き」『新潮』2003年9月号、244-247頁。

「サンクトペテルブルク建都300周年 「芸術のロシア」再び脚光 日本でも催し交流活発に」『北海道新聞』2003年10月3日。

「オーウェルの想像力と現代 1984→2004、ソフトなニュースピーク」『南日本新聞』2003年10月8日、『山陰中央新聞』2003年10月13日。

「勘違いもせず、絶望もせず」『新潮』2003年11月号、168-169頁（新人賞の論評）。

「ロシア音楽の救世主」『文藝春秋』2003年11月号、90-91頁。

「国語教室の質問コーナー」『国語教室』2003年11月号、36-37頁。

「イルクーツク—モスクワ—中東飛び歩き」『新潮』2003年11月号、352-355頁。

「新しいロシア映画の「奇蹟」 芸術的ヴィジョンの勝利」アンドレイ・ズビャギンツェフ監督『父、帰る』（映画プログラム)、2004年、10-12頁。

- 「あまりに狭い世界」『論座』2004年4月号、304-306頁。
- 「いま世界文学をどう読むか？」『デジタル月刊百科』2004年7・8月号、インターネット版。
- 「カルチュラル・スタディーズ再考」『文学』2004年3・4月号、152-174頁（石原千秋・富山太佳夫との座談会）。
- 「すばる文学カフェ アンドレイ・ズビャギンツェフ」『すばる』2004年9月号、194-197頁。
- 「二枚舌のドストエフスキー」『文學界』2004年11月号、210-232頁（亀山郁夫・島田雅彦との座談会）。
- 「世界（文学）とは何か？」『UP』2005年1月号、29-34頁。
- 「三万三千の悪夢 どこか日本人の英語に似てほっとするスラヴ訛り」『英語教育』2005年1月号、11 - 13頁。
- 「詩歌を生成する言語」『言語』2005年7月号、44-51頁。
- 「領域横断的なプロジェクト研究による人文科学再編に向けて 研究領域Vの発足と展開」『学術月報』2005年11月号、37-41頁。
- 「小さな国の大きな作家 第1回ブッカー国際賞のイスマイル・カダレ」『毎日新聞』2005年6月15日。
- 「閉じていく」時代の世界文学『すばる』2005年8月号、160-172頁（宮内勝典との対談）。
- 「なぜ世界は村上春樹を読むのか」『遠近』2005年6月号、68-73頁（柴田元幸・四方田犬彦との座談会）。
- 「特別対談 映画『太陽』と昭和天皇像をめぐる」『新潮』2005年10月号、183-199頁（アレクサンドル・ノクーロフとの対談）。
- 「終わりの中の始まりを求めて 古義人三部作を読む」『群像』2005年11月号、162-173頁。
- 「終わり無きロリータ」（若島正との対談）『図書新聞』2006年3月18日。
- 「見つめた理性の限界 スタニスワフ・レムを悼む」『朝日新聞』2006年4月11日。
- 「純白の雪の中の死 沈黙の詩人ゲンナジイ・アイギに」『毎日新聞』2006年3月27日。
- 「ロシアの村上春樹——「モノアフレ」から世界文学へ」『文學界』2006年5月、108-129頁。
- 「春樹をめぐる冒険 顛末記」『東京人』2006年7月号、88-95頁。
- 「たいせつな本 上 ドストエフスキー『罪と罰』」『朝日新聞』2006年7月23日。
- 「たいせつな本 下 堀口大学訳詩集『月下の一群』」『朝日新聞』2006年7月30日。
- 「レムは一人でそのすべてである 東欧の小さな町から宇宙を幻視した人の死」『SFマガジン』2006年8月号、10-17頁。
- 「巻頭言 もっととっつかまえよう！」『日本ロシア文学会関東支部報』No. 24、1-2頁。
- 「ヴィクトル・ペレーヴィン」『すばる』2006年12月号、184-187頁。
- 「新しい世界文学としてのバルキ・ムラカミ」『読書人』2006年12月8日。
- 「ユートピアの夢の後に」『現代詩手帖』2007年3月号、104-106頁。
- 「ニヒリズム」須藤訓任編『哲学の歴史9』中央公論新社、2007年8月、605-608頁。
- 「半歩遅れの読書術 細部にこだわる」『日本経済新聞』2007年8月5日。
- 「半歩遅れの読書術 魚を食べるように」『日本経済新聞』2007年8月12日。
- 「半歩遅れの読書術 小さな場所」『日本経済新聞』2007年8月19日。
- 「すべては少しずつ失われていく（カート・ヴォネガット追悼）」『SFマガジン』2007年9月号、34-35頁。
- 「現代ロシア美術紀行 地下活動から自由の謳歌を経て、また新たな受難の時代に？」『AVANTGARDE』Vol. 4、70-73頁。
- 「現代文芸論のフロンティア1 薄餅とクレープはどちらが美味しいか？——翻訳について」『UP』2008年2月号、22-28頁。
- 「現代文芸論のフロンティア2 ゲーテの家の庭は意外に小さかった——世界文学について」『UP』2008年3月号、40-46頁。

「現代文芸論のフロンティア3 加計呂麻島とロシア正教と特攻艇——日本文学について」『UP』2008年4月号、26-31頁。

「私」に内蔵された、宇宙と交信するアンテナ（谷川俊太郎論）『現代詩手帖』2008年4月号、89-91頁。

『チェブラーシカ』ソ連的用語集『熱風』2008年7月号、27-34頁。

「解説 現代中央ポストモダンの旗手、エステルハージ・ペーテル」『神奈川大学評論』62号、158-161頁。

「未発見の大陸か、未来のワンダーランドか」『群像』2009年5月号、360-371頁。

「「ハルキが私たちのことを書いてくれる」 どうして村上春樹はロシアでこんなに人気があるのか」『熱風』2010年3月号、15-19頁。

「名句で読むロシア文学の傑作」『NHK テレビテキスト テレビでロシア語』2010年4月-2012年3月、毎月連載（全24回）。

「いまどうして世界文学なのか ゲーテから池澤夏樹まで」『文藝』2012年2月号、30-35頁。

「翻訳は世界文学の別名である 現代日本文学が外国語に訳されて何のいいことがあるんだ、と言う人たちのために」『新潮』2012年11月号、268-271頁。

「インタビュー 翻訳大国衰える実力・多言語交流」『読売新聞』2013年7月4日。

「基調講演 21世紀のグローバル世界は教養とともに成熟する」名古屋外国語大学『グローバル時代の教養』2014年3月、10-27頁（名古屋外国語大学創立25周年記念シンポジウムのレポート。小出宣昭・林哲介・亀山郁夫とのパネルディスカッションの記録も28-48頁に収める）。

「ロシア文化人 勇気の言論 ウクライナ紛争の陰で」『朝日新聞』2014年9月23日。

「今あえてロシア文学の素晴らしさを語る プーシキンからシーシキンまで、魂の温もりを求めて」『JIC インフォメーション』2015年4月号、2-12頁。

「世界文学全集はあなたがどう読むか、だ」『kotoba』2015年6月号、44-47頁。

「対話と批判 人文社会系の本質——中・東欧研究 千葉で盛大に世界大会」『読売新聞』2015年9月12日。

「「文学」の枠を広げる画期的選考 ジャーナリストにノーベル文学賞」『読売新聞』2015年10月12日。

「ニュースの本棚 ノーベル文学賞のS・アレクシエービッチ 被災者の気持ちすくい上げ」『朝日新聞』2015年11月15日。

「小さな人々の声のみずから語り始めるとき ノーベル賞を受賞したジャーナリスト、アレクシエーヴィチの仕事」『図書』2015年12月号、14-17頁。

「今、なぜ、海外文学は面白い？ 俯瞰する視点から読み解く」『シュプール』2016年1月号、216-217頁。

「「文化は政治よりずっと大事なものだ」 ウリツカヤ、アクーニン、マカレヴィチに聞く」『れにくさ』6号、497-513頁（インタビューと解説）。

「壮大な文芸大作の世界を数時間で楽しめるロシア映画」『kotoba』2016年3月号、106-109頁。

「アンジェイ・ワイダ監督追悼」『毎日新聞』2016年10月19日。

「Dialogues with History and Signposts Toward Tomorrow / 過去との対話、未来への道しるべ」『Worth Sharing』Vol. 5、2-3頁。

「地上ではいまだに戦争で人々が殺しあい」Rething Books編『今日の宿題』Numabooks、2017年5月、66-67頁。

「鼎談 世界文学は越境する」河出書房新社編集部編『池澤夏樹、文学全集を編む』河出書房新社、2017年9月、46-63頁（池澤夏樹・鴻野友季子との鼎談）。

「お金では買えない本」『ミネルヴァ通信「究」』2018年1月号、1頁。

「第83回国際ペン・リヴィウ大会報告 「文化の結節点」で熱心な議論、ブックフェアも盛況」『P.E.N.』Vol. 445、32-35頁。

「日本文学の外国語訳・苦楽語り合うシンポ 訳して気づくこともある、翻訳に「完成」なし」『朝日新聞』2018年3月7日。

「ラプレス——世界は謎に満ちている 「愛なき」世界からのメッセージ」『現代思想』2018年3月臨時増刊号、104-107頁。

「駄洒落から大量殺人兵器まで ナボコフ『ワルツの発明』訳者解説補遺」『れにくさ』8号、256-263頁。

「ロシアを知るためのキーワード」『Ace』2018年春号、10-13頁。

「現代ロシアの「非愛」の世界 アンドレイ・ズビャギンツェフとの対話」『すばる』2018年5月号、276-283頁。

「ノーベル文学賞発表見送り 現代に相応しい選考だったか」『読売新聞』2018年5月8日。

「美しい顔」芥川賞選考 参考文献「昇華」が必要」『読売新聞』2018年7月20日。

「ドストエフスキーが日本人に人気の理由は？ 日本にも“ドストエフスキー的なもの”が至る所に潜んでいるから」『日経おとなのOFF』2018年8月号、46-49頁。

「この夏お薦めの3冊」『読売新聞』2018年8月7日（G・ガルシア・マルケス『百年の孤独』、ミロラド・パヴィチ『ハザール事典』、カズオ・イシグロ『忘れられた巨人』を取り上げる）。

「天才ならば目指すは世界」『文學界』2018年10月号、45-46頁。

「村上春樹訳『キャッチャー・イン・ザ・ライ』を読む」越川芳明『周縁から生まれる ボーダー文学論』彩流社、208-244頁、2018年10月（新元良和・越川芳明との鼎談）。

「おそロシア？すばらシア！（下） 寒くて暖かい国ロシアを知る 文学から探る日ロ交流」『週刊東京大学新聞』2018年11月20日（取材・武沙佑美）。

「もう一つの世界文学」『作品社40周年記念冊子』2019年1月、10-11頁。

「1968年（昭和43年）川端康成のノーベル文学賞受賞 世界が認めた日本の美学」『朝日新聞』2019年2月13日。

「インタビュー 名著のツボ——連載9 ドストエフスキー『罪と罰』」『週刊文春』2019年3月21日、117頁（取材・石井千湖）。

「インタビュー 名著のツボ——連載10 ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』」『週刊文春』2019年3月28日、145頁（取材・石井千湖）。

「山王と私 1」『山王1・2丁目 自治会ニュース』平成31年3月号。

「山王と私 2」『山王1・2丁目 自治会ニュース』平成31年4月号。

「翻訳がつなぐ世界文学」『読売新聞』2019年10月4日。

「池内さんの声が今でも聞こえるような気がする」『新潮』2019年11月号、190-191頁。

「ドナルド・キーンとロシア」『すばる』2019年5月号、196-197頁。

I 学会発表、講演など

《日本語》（2003年以降に限る）

「越境の文学」名古屋市立大学、2003年1月。

「越境のアポリア 反グローバリズムの可能性」東京外国語大学、2003年1月。

第3回日露フォーラム第3セッション「日露両国の相互理解・対話の深化を目指して」招待パネリスト、総合研究開発機構（イルクーツク）、2003年9月。

「文化としてのスターリン時代へ」シンポジウム「プロコフィエフ『戦争と平和』スターリン」での報告、ロシア連邦大使館、2003年10月。

日本ロシア文学会プレシンポジウム「ヴィヴァ！ 聖ペテルブルグの魅力を語る」大阪国際交流センター、2003年10月。

「イリヤ・カバコフの芸術」森美術館、2004年5月。

「20世紀のユダヤ文学」朝日カルチャーセンター（東京・新宿）、2004年6月。

第9回東京外国語大学中野健三基金シンポジウム「永遠と一日、あるいは21世紀のチェーホフ チェーホフ没後100年記念シンポジウム」東京外国語大学、2004年12月。

横浜市立大学よこはまアーバンカレッジ講義「ドストエフスキー」「トルストイ」2005年1月。

シンポジウム「ズビャギンツェフを迎えて 現代ロシア映画の世界 タルコフスキーから『父、帰る』へ」東京外国語大学、2005年1月。

シンポジウム「ヴィトルド・ゴンブローヴィチ生誕100年記念・京都会議」立命館大学、2005年1月。

「ソルジェニーツィンとユダヤ問題」研究会「近現代世界におけるユダヤ人—民族的アイデンティティと国家のはざままで」北海道大学スラブ研究センター、2005年6月（報告者兼コーディネーター）。

「越境の詩学に向けて」神戸ドイツ文学会シンポジウム「境界を引く・境界を超える ナショナリズムと越境」甲南大学、2005年7月。

懇話会「越境文学をめぐって」名古屋市立大学、2005年9月。

国際交流基金によるインドネシア日本研究セミナー派遣講師として、インドネシア大学、スラバヤ大学、パジャジャラン大学で現代日本文学に関する講演及びセミナー、2005年11月23日—12月2日。

「二人の佳人の出会い 日本とポーランドの文化交流の歴史から（日本におけるポーランド文学受容を中心に）」*International Conference: Japanese Studies in the 21st Century — Beyond Borders: In Memoriam Wiesław Kotańsk*, ワルシャワ大学、2006年5月。

シンポジウム「ロシア東欧の亡命文学——越境文学の現状をめぐって」名古屋市立大学、2006年12月。

「もっとも重厚にして最先端 ロシア文学紹介のトップランナーとしての昇曙夢」昇曙夢没後50周年記念を偲ぶシンポジウム「昇曙夢の生涯と業績を語る」奄美サンプラザホテル、2007年5月。

「亡命文学再論〈脱領域の知性〉か、ETか？」公開フォーラム〈誘惑と越境〉第2部 越境——文学・美術・文化財、東京大学法文2号館、2007年7月。

「宇宙から呼びかける二羽のカモメ 現代日本小説におけるロシア人のイメージ」国際日本文化研究センター平成20年度海外研究交流シンポジウム「ロシア極東文化の中の日本」ウラジオストク極東大学、2008年9月。

「美女と醜女、または翻訳可能性と不可能性の間で」ワークショップ「ロシア文学にとって翻訳とは何か？ 理論・実践・受容」中京大学（日本ロシア文学会全国大会）、2008年10月。

「中心・周縁・中間 スラヴ地域研究の活性化に向けて」地域研究コンソーシアム「人文学的アプローチによるポーランド地域主義研究 文学・芸術・言語を通して考えるポーランドの周辺地域」東京大学文学部、2009年1月。

「エステルハージと中欧文学の「地詩学」 ドナウを下って、世界文学の未来へ」大阪大学グローバルCOE「コンフリクトの人文学」国際研究教育拠点主催シンポジウム「中欧の詩学」大阪大学豊中キャンパス、2009年2月。

「芸術は何を超えていく（超えていけない）のか？」日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業シンポジウム「芸術は誰のものか？」KOKUYOホール、2009年3月。

「ロシア文学者としての内村剛介」第21回上智大学ロシア研究シンポジウム、上智大学、2010年2月。

「翻訳で迷子になって Lost in Translation」ロシア語通訳協会30周年記念集会、上智大学、2010年11月。

ユーラシア研究所創立20周年記念講演「光源氏 vs. カラマーゾフ ロシアと日本 文学が映し出す互いの姿」2009年12月。

日本ロシア文学会中部支部講演会「チェーホフの新訳をめぐって」中京大学、2012年2月。

「大江健三郎の最近の長篇小説〈古義人三部作〉と『水死』を中心に」中国社会科学院（北京）、2012年3月。

「村上春樹 vs カラマーゾフ 現代日本の翻訳文化と世界文学」岡山大学文学部、2013年3月。

「一」と「多」の間で 外の境界と内なる境界（現代ロシア文学と映画の例に基づいて）」ロシア・東欧学会、津田塾大学、2013年10月。

「日本文学の「国際化」と新しい越境文学のありかた」*Japanese Civilization: Tokens and Manifestations*, 日本美術技術博物館 Manggha（クラクフ）、2013年11月。

「ドイツ語圏中欧とスラヴ文化 フロイト、リルケ、カフカ」日本オーストリア文学会、麗澤大学、2014年5月。

「ロシア人は村上春樹がお好き？ 源氏物語から1Q84まで——ロシアにおける日本文学の受容」、シンポジウム「ロシアのCOOL JAPAN」聖心女子大学、2014年5月。

「村上春樹 vs. カラマーゾフ 現代日本の翻訳文化と世界文学」*International Japanese-English Translation Conference*, 東京ビッグサイト、2014年6月。

「羊、鼠、象、蛙 村上春樹における動物イメージと日本人の自然観」国際シンポジウム「日本文化表現の多様性」ワルシャワ大学、2014年10月。

特別講演「日本の詩と小説の世界」湖北大学・中南民族大学（中国）、2014年11月。

「ユーラシア世界を知るための市民教養講座 ロシア東欧の文化と芸術」千葉商工会議所、2015年6月-2015年7月。

「世界を旅する14 ポーランド・ツアー」かわさき市民アカデミー、2015年10月-2016年1月。

「特別講演 日本におけるロシア文学の翻訳と受容 二葉亭四迷から村上春樹まで」群馬県立土屋文明記念文学館、2015年10月。

「〈ロシア人は好きだが、ロシアは好きじゃない〉ポーランドとその巨大な隣国のねじれた関係について（文学の例に基づいて）」2015年度フォーラム・ポーランド会議「ポーランドと隣人たち」青山学院大学アスタジオ、2015年12月。

「ハルキ vs. カラマーゾフ 現代日本文学における「偉大なるロシア文学」の影」台湾日本語文学学術研討会、輔仁大学、2015年12月。

「「かえるくん、東京を救う」と世界文学」、第5回村上春樹国際シンポジウム、淡江大学（台湾）、2016年5月。

「グローバル化時代の文学の可能性 日本文学から世界文学へ」三重県立四日市高等学校（スーパーグローバルハイスクール〈グローバル・リーダー学〉授業）、2016年6月。

「日本語教師ロシア赴任前研修講義——ロシアにおける日本文学の受容 ロシア人は村上春樹がお好き？ 源氏物語から村上春樹まで」日露青年交流センター、2016年8月。

「JPIC 読書アドバイザー養成講座基調講——世界の文学を読む あまりにも本が多すぎてどこから読んだらわからず途方に暮れているあなたのために」日本出版会館、2016年8月。

「世界文学への誘い 未踏の沃野のヒロイン、ヒーローは君たちだ」北海道北見市常呂高等学校（東京大学文学部公開講義）、2016年10月。

招待講演「20世紀日本の〈戦争と平和〉——加賀乙彦の大河小説『永遠の都』と『雲の都』を読む」、*The 10th Days of Japan at the University of Warsaw*, ワルシャワ大学（ポーランド）、2016年10月。

「紀貫之からマラルメまで 言語が存続するための手段としての詩人たち」東本願寺（親鸞賞発表記念東本願寺シンポジウム・パネリスト報告）、2016年12月。

JASRAC 講座ミュージック・ジャンクション「世界を旅する音楽 ウクライナの音楽と文学」JASRAC けやきホール、2017年1月。

「古典戯曲連続講座第2回 チェーホフ——チェーホフは森のキノコです」京都芸術センター、2017年3月。

「連続講義 ユダヤ精神史——第1回 ユダヤ学のすすめ（総論）」朝日カルチャーセンター横浜、2017年4月。

「ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフ ロシア文学の鬱蒼たる森を探索する」東京大学文学部法文2号館（第8回東京大学文学部公開講座）、2017年6月。

「文学サロン講演 ロシア文学の現在 ペレストロイカからプーチンまで」日本文芸家協会、2017年7月。

「基調講演 「人間ならざる者たち」の魅惑と恐怖」、淡江大学主催第6回村上春樹国際シンポジウム、同志社大学、2017年7月。

「グローバル化時代に世界文学をどう読むか？ 想像力と人文知をめぐって」三重県立四日市高等学校（2017年度第4回グローバル・リーダー学「文化研究」分野講義）、2017年9月。

「トランプ・プーチン時代のロシア東欧の文化事情」ロシア・東欧学会、津田塾大学、2017年10月。

「チェーホフの『サハリン島』をめぐって」北海道立文学館、2017年10月（池澤夏樹との公開対談）。

「ナボコフ・コレクション（新潮社）・全5巻刊行記念公開対談」（多和田葉子と）新宿紀伊國屋書店、2017年11月。

「特別講義 文学は何の役に立つのか？——「ポスト・トルース」時代のことば」桐光学院中学・高等学校、2017年11月。

「上智大学公開学習センター講義——日本人とロシア文学 内田魯庵から村上春樹まで」上智大学、2017年11月。

「カズオ・イシグロとノーベル賞と世界文学」津田塾大学広瀬記念ホール（津田塾大学英文学科企画特別講義シリーズ「カズオ・イシグロ ノーベル文学賞受賞記念連続講演会」第1回）、2017年11月。

「NHK『100分 de 名著』特別講座 世界文学を徹底的に語りつくす——ドストエフスキーからカズオ・イシグロまで」NHK文化センター青山教室、2018年1月（島田雅彦と）。

2018年4月14日（土）シンポジウム「世界文学を可能にしているのは翻訳である」日仏会館国際シンポジウム「世界文学の可能性——日仏翻訳の遠近法」日仏会館（東京）、2018年4月。

招待講演「大江健三郎と世界文学——周縁から普遍へ」第四回大江健三郎文学研究会、紹興越秀外国语学院（中国）、2019年3月。

パネリスト報告、第18回東京大学ホームカミングデイ・シンポジウム「言葉の危機——入試改革・教育政策を問う」東京大学文学部、2019年10月。

《英語》

“Aspects of Post-utopian Imagination: The Cases of Brodsky, P’etukh, Petrushevskaya, and Makanin,” *International Conference on Communist and Post-Communist Societies*, The University of Melbourne, July 1999.

“The Position of Viktor Pelevin and Boris Akunin in Contemporary Russian Literature,” *VI ICCEESWorld Congress*, Tampere, Finland, July 2000.

“The Russo-Japanese War and Russian Literature,” *Re-imagining Culture in the Russo-Japanese War*, Birkbeck, University of London, March 2004.

“On Stylistic Exuberance of *The Gift* as a Russian Novel,” *International Nabokov Conference in Kyoto* (organized by The Japan Nabokov Society), March 2010.

“Toward the New Age of World Literature,” *International Seminar: Redefining World Literature(s)*, University of Indonesia, July 2006.

“Toward a New Age of World Literature: The Boundary of Contemporary Japanese Literature and Its Shifts in the Global Context,” *Language, Literature, Culture, Identity*, Belgrade University, September 2008.

国際交流基金「日本文学巡回セミナー」派遣講師として、ヴェトナムのハノイ大学、フエ大学、ダナン大学、ホーチミン大学などで講演（2009.9.15-9.29）。

“Haruki vs. Karamazov: Contemporary Japanese Literature under the Shadow of the Great Russian Literature,” *Todai-Yale Initiative Lecture Series*, Yale University, December 2009.

“Film Adaptations of Stanislaw Lem’s *Solaris*,” *2nd Symposium on Comparative Literature: Reform, Reuse and Recycle*, 神奈川大学, June 2012.

“Shifting Borders in Contemporary Japanese Literature,” *Concept Laboratory: Approaches to World Literature*, *Concept laboratory: Approaches to World Literature*, Dahlem Humanities Center in cooperation with the Friedrich Schlegel Graduate School, Freie Universität Berlin, June 2012.

“The Seagull Goes to the Cosmos, and Haruki Goes to Sakhalin,” Key Note Speech, *5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies*, 大阪経済法科大学, August 2013.

“Japanese Literature in the Post-3/11 Era,” *Dialogue of Armenian, Russian and Japanese Cultures: The Experience of Comparative Analysis*, Russian-Armenian University (Yerevan), September 2013.

“The Role of Russian Literature in the Development of Modern Japanese Literature from the 1880’s to the 1930’s: Some Remarks on Its Peculiarities,” *Russia in East Asia: Imagination, Exchange, Travel, Translation*, Columbia University, February 2014.

“Russian Literature in Japan: Translation, Reception, and Influence,” II International Conference on Methods of Teaching Oriental Languages: Actual Problems and Trends, Higher School of Economic (Moscow), May 2014.

“Pasternak in Japan: Reception and Translation,” *Poetry and Politics in the 20th Century: Boris Pasternak, His Family, and His Novel Doctor Zhivago*, Stanford University, September 2015.

“Contemporary Tendencies in the Study of Russian and Soviet Literature in Japan: Toward an East Asian Network of Scholars,” *East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies*, 華東師範大学, September 2016.

“Sarkatvelo Dreaming: Reception of Georgian Images in Japan through Russian Literature,” *Dialogue Between Georgia and Japan: Exploring the History and Future of Scientific and Cultural Exchange*, Ivane Javakhishvili Tbilisi State University, June 2017.

“Japanese Literature after World War II: Kawabata, Abe, Oe, and Murakami,” *Global Japan Studies Summer Program 2017, Institute for Advanced Studies on Asia*, University of Tokyo, August 2017.

“Strange Encounters of the Two ‘Beautiful Ladies’: Mutual Interest and Influence between Japanese and Polish Literature,” *The 13th Days of Japan*, University of Warsaw, October 2019.

《ロシア語》

«Восприятие Набокова в Японии» 第2回国際ナボコフ学会（サンクト・ペテルブルク）、ナボコフ基金主催、1994年4月。

«О не совсем русской поэтике Довлатова» アメリカ AAASS 年次大会（シアトル）、1997年11月。

«Мои встречи (и невстречи) с Сергеем Донатовичем. Японская довлатовиана» 第1回国際ドヴラトフ学会（サンクト・ペテルブルク）、1998年5月。

«Пушкин и Набоков в Японии» プーシキン生誕200年・ナボコフ生誕100年記念国際学会（サンクト・ペテルブルク、科学アカデミーロシア文学研究所）、1999年4月。

«Рериховедение в Японии» レーリッヒ国際学会（モスクワ東洋美術館）、1999年10月。

«Гриномания в Японии» アレクサンドル・グリーン国際学会（フェオドシア、アレクサンドル・グリーン博物館）、2000年9月。

«Образ русских в современной японской литературе» シンポジウム「日本とロシア——相互イメージの中で」（モスクワ、ロシア国立人文大学）、ロシア国立人文大学東洋文化研究所、2000年10月。

《Взаимопонимание через литературу: русская литература в Японии и японская литература в России》連続講演：モスクワ国立大学ジャーナリズム学部、2002年10月2日、モスクワ国立大学文学部、2002年10月31日、モスクワ日本センター「ミルビス」、2002年10月31日。

「日露両国の相互理解・対話の深化をめざして」第3回日露フォーラム第3セッション（イルクーツク）、総合研究開発機構、2003年9月12～13日。

《Восприятие творчества Булата Окуджавы в Японии》第3回国際オクジャワ学会（ペレジェールキノ、国立プラート・オクジャワ記念博物館）、2005年3月18日。

《Олеся и Набоков. Сравнительный подход к их искусству видеть мир》（Санクト・ペテルブルク、ナボコフ記念館）、国際学会「ウラジーミル・ナボコフと亡命ロシア文学」、2005年7月21～23日。

《Современная японская литература и мировой контекст》第8回「日本の歴史と文化」会議、ロシア国立人文大学、2006年2月15日。

「日本におけるロシア文学の翻訳の新しい傾向」第1回国際翻訳者会議、モスクワ（全ロシア外国文献図書館）、2010年9月3日。

《Харуки против Карамазовых: Влияние «Великой русской литературы на современную японскую литературу》中国社会科学院ロシア文学研究部会、中国社会科学院（北京）、2012年3月16日。

《Переводы Чехова и Набокова на японский: какие трудности переводчик должен преодолеть》II Международный конгресс литературных переводчиков Россия国立外国文献図書館、2012年9月7日。

《Русская литература в Японии сегодня: перевод, восприятие и влияние》ロシア国立外国文献図書館、2012年9月8日。

《В Японии очень мало знают о реальных русских людях》（интервью）、Спецпроекты ЛГ（Звезды мировой русистики. Наш человек в Японии, «Литературная газета» 15.1.2014.

《Переводы В.В.Набокова и А.П.Чехова на японский язык: о необходимости нового перевода классики》, III Международный конгресс переводчиков художественной литературы, Библиотека иностранной литературы (Москва), 5.9.2014.

《Киргизская литература в Японии. Манас и Чингиз Айтматов》, Aitmatov Literary Forum, Manas University, Bishkek, 30.09.2014.

《К изучению истории «истории русской литературы» в Японии》, Международная конференция «Национальные истории русской литературы》, 首都師範大学（北京、中国）, 24.11.2015.

《Составляя новую антологию русской поэзии》第4回国際翻訳者会議（モスクワ）, 8-11.9.2016.

特別連続講演(1)《О современной японской литературе Восприятие русской литературы в Японии сегодня》, (2)《Переводы Чехова снова на японский язык》, Музей кн. Чехова «Остров Сахалин», Южно-Сахалинск, 25.5.2017.

《Чайка летит в космос, а Харуки -- на Сахалин》国際学術シンポジウム「チエーホフとサハリン島の文学」（サハリン・チエーホフ「サハリン島」博物館と共催）、東京大学文学部、2017年10月12日。

《ポーランド語》

“Stanislaw Lem i ja,” Kongres LEMologiczny (レム学会議), Kraków, Wydawnictwo Literackie, 14.5.2005.

J 会議組織、チェアなど

東大国際シンポジウム「ロシアはどこへ行く？ 歴史・文化・社会」東京大学山上会館、1996年9月（報告「〈未来の後〉のロシア文学・ポスト共産主義、ポスト・ユートピア、ポストモダン」も行う）。

国際シンポジウム「ユーラシアの風 詩・音楽・映画に見るロシア文化の広がり」と日本」東京大学文学部1 番大教室、1997 年 12 月。

水戸美術館主催シンポジウム「未来の後に未来はあるか 現代美術の模索と可能性」国際交流基金国際会議場、1999 年 10 月。

国際シンポジウム「ユートピアの後に芸術は可能か？」東京大学文学部法文 1 号館、1999 年 10 月。

第 1 回日露作家会議（モスクワ、ロシア国立外国文学図書館）、国際交流基金助成、2000 年 3 月（円卓会議の司会。参加者：島田雅彦、多和田葉子、山田詠美、ボリス・アクーニン、ウラジーミル・ソローキン、タチヤーナ・トルスタヤ）

〈東京—モスクワ 2001〉第 2 回日露作家会議、東京大学山上会館、2001 年 10 月（共編『日露作家会議〈モスクワ—東京 2001〉資料集』全 8 巻の編集も担当）。

シンポジウム「スターリンとは何だったのか」東京大学法文 2 号館、2003 年 7 月。

シンポジウム「ブンガク畑でつかまえて 外国文学の愉しみ」東京大学法文 2 号館、2003 年 10 月。

国際シンポジウム「21 世紀のチェーホフ」アーツフィア、2004 年 9 月（事務局長）。

日本ロシア文学会プレゼンポジウム「時空を超えて今チェーホフを語る」稚内北星学園大学、2004 年 10 月。

ヤーン・カプリンスキ講演・朗読会「さまよう境界 言語と詩学をめぐって」東京大学文学部法文 2 号館、2004 年 11 月。

シンポジウム「新しい文学の声」東京大学法文 2 号館、2004 年 11 月。

シンポジウム「ロシアの作家ボリス・アクーニンを迎えて 現代ロシア小説の最前線」東京大学法文 2 号館、2005 年 6 月。

国際研究フォーラム「未来（ユートピア）への回帰」神戸大学、2005 年 7 月。

しずおか世界翻訳コンクール 10 周年記念国際文学シンポジウム、静岡市、2005 年 9 月（企画協力のほかトークセッション出演）。

国際シンポジウム&ワークショップ「春樹をめぐる冒険 世界は村上文学をどう読むか」東京大学教養学部、2006 年 3 月（企画委員およびチェアパネルとして「翻訳本の表紙を比べる」、ワークショップとして「翻訳の現場から」を実施）。

国際シンポジウム「ポーランド・日本・アメリカ 境界を超える文化」東京大学文学部法文 1 号館、2006 年 6 月。

「ヴィヴァ、カラマーゾフ！ ロシア文学古典新訳を考える」東京大学文学部法文 2 号館、2007 年 7 月。

2009 年度国際交流基金賞受賞者記念講演会「ボリス・アクーニン『日本と私』」東京大学文学部法文 2 号館、2009 年 10 月。

日本学術会議助成国際研究集会 World Literature and Japanese Literature in the Era of Globalization: In Search of a New Canon（グローバル化時代の世界文学と日本文学 新たなカノンを求めて）東京大学山上会館、2013 年 3 月。

シンポジウム「東京大学で一葉・漱石・鷗外を読む」東京大学文学部法文 2 号館、2015 年 2 月。

第 9 回国際中欧・東欧協議会世界大会、幕張メッセおよび神田外語大学、2015 年 8 月（下斗米伸夫と共同組織委員長）。

ポーランドの国民作家シェンケヴィチ生誕 170 周年・没後 100 周年記念特別企画「講演 ヘンリク・シェンケヴィチの生涯と作品」東京大学文学部法文 2 号館、2016 年 6 月。

シンポジウム『『ディブック』 その成立と受容をめぐって』東京大学文学部法文 2 号館、2016 年 2 月（記録映画の上映も実施）。

「世界文学村と愉快的仲間たち」東京大学文学部法文 2 号館、2016 年 2 月。

第 2 回 JLPP 翻訳コンクール授賞式およびシンポジウム「現代日本文学の翻訳 作家と翻訳家の対話」日本近代

文学館、2016年3月。

東京国際文芸フェスティバル2016、国立新美術館他、2016年3月（「特別対談 海外文学の愉楽（池澤夏樹、川上弘美）」のモデレーターも担当）。

国際シンポジウム「〈聖なる愚者〉が切り開く文学の未来 ロシアの作家・中世研究者エヴゲニー・ヴォドラスキンを迎えて」東京大学文学部法文2号館、2017年3月。

第4回世界文学・語圏横断ネットワーク「いま世界（の）文学をどう読むか？ 研究・教育・出版」（パネルのチェア）東京大学文学部法文2号館、2016年4月。

東大オープン講座「人生に、文学を。」東京大学文学部法文1号館、2016年11月。

「ノーベル賞受賞作家アレクシエーヴィチとの対話 『戦争は女の顔をしていない』から『セカンドハンドの時代へ』」東京大学文学部法文2号館、2016年11月。

東京大学・トビリシ国立大学共催シンポジウム Dialogue between Georgia and Japan: Exploring the History and Future of Scientific and Cultural Exchange トビリシ国立大学、2017年6月26日～29日。

「ジョゼフ・コンラッド生誕160周年記念特別企画講演 ジョゼフ・コンラッドとポーラ」東京大学文学部法文2号館、2017年7月。

JLPPシンポジウム「日本文学の翻訳をめぐる」学会館、2018年3月。

国際学術シンポジウム「チェーホフとサハリン島の文学」主催（サハリン・チェーホフ『サハリン島』博物館と共催、東京大学文学部、2017年10月12日）。

EU文学フェスティバル企画「ヨーロッパ文学の最前線 Rein Raud との対談」日欧州連合代表部ヨーロッパハウス、2017年11月。

「ポーランドのSF小説家スタニスワフ・レムのタベ（日本未公開映画上映とパネルディスカッション）」代官山ツタヤ、2017年11月。

ハーヴァード大学世界文学研究所夏期集中セミナー東京大学セッション（実施責任者）東京大学、2018年7月2日～26日。

The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies（第10回スラヴ・ユーラシア研究東アジア大会）副組織委員長、東京大学。2019年6月28日～30日。

丸善出版『ロシア文化事典』刊行記念シンポジウム「ロシアの謎、魅惑の文化」東京大学文学部1番大教室、2020年2月。

K テレビ・ラジオでの啓蒙・教育活動

放送大学「今日の世界文学」（リレー講義、ロシア東欧文学を担当）1994年～97年度放送

NHKラジオ・ロシア語講座講師・テキスト執筆

入門編 1990年4月～9月（再放送1991年10月～1992年3月）

入門編 1992年4月～9月（再放送1993年10月～1994年3月）

応用編「ドヴラートフを読む」1996年10月～1997年3月

応用編「吟遊詩人オクジャワの世界」1998年10月～1999年3月（再放送2000年4月～9月）

NHK教育テレビ・ロシア語会話監修・テキスト執筆 1994年4月～1996年3月

NHKテレビ（Eテレ）100分de名著「チェーホフ かもめ」2012年9月（4回にわたって放送）講師

NHKラジオ「英語で読む村上春樹」講師（NHKラジオ第2放送）およびNHK出版による月刊テキスト執筆、2013年4月～2014年3月

NHKテレビ（Eテレ）100分de名著「レム ソラリス」2017年12月（4回にわたって放送）講師

作成協力：今井亮一、小澤裕之、邢亜南、島袋里美、下島彬、鈴木愛美、高橋知之、坪野圭介、沼野堯、Agata Bice。

付記：私は何が嫌いといって、自分の「業績」を記録して表にすることほど嫌いなことはない。これまであれこれ雑多な文章を書き、ロシアやポーランドやアメリカでたびたび学会報告や講演をしてきたが、びしっと自分で業績表をまとめることがついぞできたためしがない。自分が何かを発表したら、それを一つも洩らさずせつせと業績表に書き込んでくれる勤勉な小人でも床下にいたらいいのに、といつも思っていた。振り返ってみれば、自分のやったことを表に書き込む前に、もう他のことに熱中していて、前にやったことを忘れていたといった生き方をずっと続けてきた。そのつけがたまって大変なことになり、今回『れにくさ』退職記念号に恒例により業績表を掲載するにあたって、どこから手を付けたらわからず一年以上途方に暮れていたのだが、幸い、多言語に対応できる現代文芸論研究室の教え子、スタッフを始めとする多くの人たちの献身的な協力により、なんとかここまでまとまった。本当にありがとうございました。とはいうものの、これはまだ網羅的なリストには程遠い状態のもので、多くの「業績」が抜けている（ような気がする）。その大部分はどうでもいいような雑文だとしても、中にはひょっとしたら重要な、素晴らしいものもあるんじゃないかという気がしてならない。いや、この業績表から抜けている本当にいい文章は、まだ書いていないものなのだろう。そう、素晴らしいものはいつも、いまここにはないものなのだ。考えてみれば、それがユートピア的願望の原点でもあった。（沼野充義）